

## 第四章 大地震から戦争へ

### 一 二代監督占部百太郎

大正十年田中一貞の急逝による監督の欠員は十月一日付を以て大学法学科教授占部百太郎が任ぜられた。何故占部が選ばれたかは推測だが、図書館の相談役の中での年長者であったからであろうか。占部は福岡県遠賀郡出身、明治二年生れである。二十八年慶應の大学部文学科卒であったから、田中より一年先輩であり、年齢は三歳も上であった。学生の頃より文筆に親しみ、新聞記者志望で、時事新報、日本新聞などの記者の経験もある。三十二年大学教務掛になり、慶應義塾学報編輯主任を兼ねた。四十年には大学予科教授、四十四年文学科教授になり、同年八月より大正二年三月まで英国に留学した。ロンドンでは高橋誠一郎と同宿したこともある。筆まめな高橋は「私の一番長く居った家庭はウエスト・ハムステッドのスチーアという老建築師の家であった。此の家には板倉卓造、浜田精蔵、伊藤重郎などという塾員が私の以前にペーピングゲストとして滞在して居り、私の後には占部百太郎氏が可なり長く宿泊して居られた」長男は南阿戦争で死に、次男は会社に勤めていた。メーブルとリレイと呼ぶ姉妹がいて、姉はショップガール、妹はタイピストであった。インテリの妹娘は何年か前に日本に帰った板倉に尊敬の念を持っていたが、占部は無学だが善良な姉娘に心をひかれていたという。（『王城山荘隨筆』）当時の英国は日英同盟の最中であり、歐洲の覇権



占部百太郎（大正11年頃）

を握って進取の気象に富み、占部はその国民性を愛した。帰国後は文学科教授として「西洋史」を、政治科教授として「英国憲法史」を講じた。

占部が図書館監督となって初めての仕事は図書館相談役会を開くことであった。十二月十日烏森の古今亭で晩饗を共にしながら、今後の運営と協力を懇請した。当時の相談役は幸田、西村、沢木、三辺の外、占部の後任として田中萃一郎、それに鎌田塾長と石田幹事が陪席した。その時の内容は記録がないのでわからないが、其の後の様子から察するに、前監督の方針を一先づ踏襲するというのであったらしい。月次展覧会、図書館年報の継続である。展覧会は大正十一年二月に基督教に關するものが行われた。年報は大正十年度が一回出された。尤も展覧会は別に經濟学会と共催して十二年六月「アダムスミス關係經濟学文書展」が開かれた。これらの打ち切りは館員にその人が得られなかったことにもあろう。月次展覧会は前述したように洋書係で内藤鳴雪に風貌が似ていた老功な竹内忠一が止めたのが打撃となった。後任の卒業したての洋書係村岡省五郎では荷が重すぎた。年報は目録編纂にかえられたが、何しろ占部の監督任期は大正十年十月から十二年十二月までの二年であったから、完成を見ずして監督をやめた。

年報を目録編纂―その第一着手として洋書目録が選ばれた―にしたのにも、年報の発行が極端に遅れたことにも原因があった。大正十年度のが十二年五月やっと日の目を見た。年報は速報性も加味するものであるから、極端な遅延

は実用性を薄める。その上、年度毎の目録の発行には索引を別に作らざる限り、不便である。そこで洋書分類目録作成事業が初められ、洋書係は二名に増員された。村岡は秋田の人で郷里に近いことから田中監督に知られた。大正八年就職したが、文学科でカントを専攻し、元々教員志望であった。大正十年「智識の問題」という著述を出して評判が良く、十一年教員になった。後任はこれも教員志望の、前述した恒松安夫であり、田中千代松は少しおくれ就任した。東京都大田区の出身で十一年の理財科卒、学生時分に三田新聞に入っていたのでその会長をしていた占部に知られ、すすめられて採用された。田中は別に教員志望ではなかったそうだが、恒松を見習った仕事振りで、そして尚、恋愛の熱病にとりつかれていて仕事に精を出せなかった由である。目録原稿は中々はかが行かなかった。洋書目録の序文にもいわれているように、図書の増加の甚しきことや、震災という大事変があったことの他に、係の異動の烈しさも遅延の一つであった。恒松は十三年に教員になり、後任は平井新であり、田中も十四年に去り、後任は加藤元彦であった。平井、加藤は次代監督小泉時代に入る。

占部監督が企劃したものに英国のブルー・ブックとハンサード版バリヤメント・デベートの注文がある。この大部の図書の注文は占部の収書態度から来ていると思われる。「書籍を買入れるについては一定の態度といったものを定めているのです。私の専門とする西洋史、殊に英国憲法史に関して一定のシステムを樹てて買入れるのです。然も第一流の著書、即ちスタンダードワークは必ず集めるのです。…要するに幾ら沢山本を集めても第二流、第三流の本でしかもばらばらでシステムのない集め方では書齋の権威というようなものがないと思います」（三田新聞昭和十二・一）これは個人の収書を述べたのだが、以上の大冊の注文は図書館における彼の方針をズバリ表明せるものであろう。

ブルーブックは型が大小あり、厚薄も様々で、当時の図書館員には扱いかねるもので、極少部分が整理され、閲覧に供されたが、大部分は未整理のまま、二十年放置され戦災に遭ってしまった。誠にもったいない話である。

占部監督時代の寄贈の主なものには、大正十年に島村久遺蔵洋書の二百六十余冊、十一年には新井由三郎の漢籍―上海の石印本などが主である―九千二百余冊がある。新井本は先きに寄贈された伊東希元の漢詩書と併せて、漢籍の充実を實のらせた。但し既蔵書と重複本がかなりあったので、寄贈者の同意を得て、重複本の塾内教職員への入札売りが行われた。重複本の入札売りは書庫の狹隘と共に、其後も数回行われたが、これが最初である。図書館の洋書係から待望の教員となった村岡省五郎は猛勉強と大酒のたたりで翌十二年二月急死した。そこでその遺蔵書四百三十二冊が寄贈された。勿論専攻のカント哲学に関するものが多かった。特殊なものでは竹越与三郎が日本経済史著述の際に使用した田制に関する資料が同年寄贈されている。震災後には江守善六所蔵の和装本千五百余冊の寄贈があった。江守家は徳川時代から続いた質屋の元締という旧家であるが、その子息が塾の教員をしていた縁故による。江戸の市井の雑書が多く、神道に関するものも含まれている。

占部監督のときの最大の出来事は大正十二年九月一日十一時五十八分の関東大地震であろう。図書館は大いにゆさぶられ、地震に弱いという煉瓦造りの欠陥を暴露して各所に亀裂を生じた。殊に八角塔と本館の継ぎ目や記念室側の壁がひどかった。書庫も書架が倒れ、本も床に落ちた。けれども休暇で閲覧者も少く、館員も昼飯直前のことであったので、建物の破損などによる人体への被害は全くなかった。ただ一人、事務員の伊達良春は地震で建物の外へ飛び出し、余震で建物の揺れ動くのを見ながら後ずさりして、石垣から下の道に落ちたという。現在の三田通りに面した

東門の前の石垣だから相当高い。今であつたら大怪我をしたろう。道も石垣と道の間の溝もコンクリートで堅められてあるから。ところが、その頃はまだ舗装されず土だったので、小さな怪我ですんだ。伊達は旧仙台藩主の息子、祖父は維新に活躍した宗城である。明治四十二年法律科卒業で、大正六年に図書館に入った。洋書目録の補助や新刊書の報告など小さな仕事を扱っても苦にせず、頗る応揚であつたが、殿様風の抜け切れない面もあつた。小泉信三が塾長になつて或る日、図書館に来たことがあつた。玄関の広間ですれちがったとき、伊達が急に塾長の襟をつかんで激怒した。襟をつかまれた人も、そばにつき添っていた人々も何で突然怒つたのか、訳けがわからなかつたが、小泉は四十二年政治科卒業で、自分の方が一年先輩であるのに、すれちがつても挨拶しないのは怪しからんという伊達の言ひ分であることが後でわかつた。弟には満洲で馬賊になり、満洲国建設後は高官になつた伊達順之助がいる。変つた兄弟である。

地震後、東京の各地に火災が起きて避難民が続々、三田の山へ上つて来た。火災ばかりでなく、津波があるからと警官が三田の町民を山に誘導したそうである。図書館初め、塾監局、大講堂などの煉瓦造りは亀裂のため、危険なので、避難民は木造校舎に収容し、一時は八百人を越え、教務係が主となつて救護に奔走した。二日の朝、丘から下の街を望むと新橋方面から金杉へかけては火の海で、漸次近寄つて来るけいが見えたが、異様な風景は人家の屋根や物干台に赤い布がひらひら翻っているのが見えた。女の腰巻を火の神は忌むというので、竿の先にそれをしばりつけたのである。汚れたものほど効頭があるとのいい伝えであつたそうだが、こうした風景もこれが最後であつた。二十五年後の戦災に見舞われたときはもう屋根の紅旗を誰れも見なかつた。もつとも婦女子の風俗も變つていたからでも

あろう。

避難民ばかりでなく、罹災した時事新報社は塾内に仮事務所を設け、二日には戒厳令が敷かれて高崎歩兵第十五聯隊第二大隊本部が山上に置かれ、又文部省も芝出張所を塾内に置くという風で、山の上の建物は一応無事であっても、この有様では授業が出来ない。やっと十月八日大学及び専門部の授業が初まることになった。図書館も同時に開いたが、学生に罹災者もあり、地方の学生は下宿を得ることが困難な状態であって、満足に行われたとは思えない。図書館では十月二十七日、外壁にひびの入っている記念室へ館長以下事務員、雇員が集って当面の対策を協議した。集った人達は占部監督、安食主任、笠原、佐々木、楠山、恒松、田中、伊達、岡崎(義元)、高橋(秀明)、国分(剛二)、山木、小池(益郎)、古田(三七郎)の十四名で日誌によれば

「占部氏より左記の報告並に決議をなす

- 一 電車開通時間延長につれ、開館時限八時半、九時と次第に延長の上、平時に復すること
- 一 目録は印刷所焼失の為め一時頓挫せるも、原稿はひきつづき作製のこと
- 一 笠原氏補助として伊達氏執任の事

右終って雑談 四時散会

- 一 焼失各大学へ図書館利用方懇懇せしこと

とある。

図書館を焼失した各大学へはその前日の二十六日付で、見舞と共にその大学の教授のうち希望者には、塾図書館の

圖書を自由に借覽させる旨を通知した。これに対して東京商科大学長佐野善作、明治大学学長富谷銈太郎、専修大学長相馬永胤、東京帝国大学からは経済学部長矢作栄蔵、法学部長山田三良、文学部長三上参次各々から感謝状が来り、図書館利用の件に対しては教授に夫々伝えるから、出頭の節は何分しかるべく御取り計い願いたいとこもごも記されてあった。卒先して利用を慫慂した行為には余程の感銘をあたえた見え、其後、塾図書館の八角塔の亀裂が大修覆を要することとなって、工事が初まるのを知って、東京帝国大学図書館では山田珠樹の名で五十円の見舞金が送られて来た。しかし震災後の混乱は学者の心も落著かせなかつたと見え、塾の図書館へ顔を出した他大学の教授は少なかったようである。

大地震による慶應義塾の損害は十月十五日の調査によると総額三十四万七千円に達し、そのうち図書館の建物の被害は十二万円と見積られた。そこで十月二十三日の評議員会で復旧事業費拮出のための塾債三十万円が募られる。一口五十円、利足年五分、但し一年間は無利息、償還期間は七年据置きで、以後年々十万円づつ抽籤で償還することとし、十年完済の予定であった。この募集及びそれにつづく義塾復興は大事業であるので、首脳陣の一新が図られた。占部が図書館監督の二年間に永く塾長を勤めていた鎌田が文部大臣になるので十一年六月辞めた。後任は一時門野幾之進がつとめたが、十二月福沢一太郎が正式に就任した。翌十二年九月の大地震による被害の復旧には強力な人事が必要とされた。十一月林毅陸が塾長となり、翌十二月理事に占部があげられた。占部は後年の回想で、理事職は激務であったと語っている。従って図書館監督は別人に譲らざるを得ない。

選衡の結果、翌十三年一月小泉信三が監督になった。小泉が選ばれたのは何故だったろうか。小泉はこれまで図書

館に関係がなかった。相談役にもなっていない。小泉が監督に選ばれたのは、多分小泉の父が元塾長であり、義塾当局にも評議員達にも名が知れていたからであろう。小泉が塾長に選衡されたときも、多分そのような事情だろうとは小泉自ら後に述懐する所である。小泉の監督は大正十三年から昭和八年十一月まで十年間続いた。

占部の其後を略述しよう。理事は昭和三年十二月まで続いた。その間、大正十五年高等部主任となり、昭和五年辞した。理事退任後は文学部教授として西洋史、特に仏蘭西革命の話が得意であった。仇名は「ゆるふん」、人柄は学者的で、事務的なことには不適であった。理事の職が自ら語るように激務すぎたのか、晩年はひどい神経衰弱にかかった。十三年四月休職し、十五年三月慶應から去った。そして二十年三月五日慶應病院の精神病棟で歿した。終戦間際で物資が極端に欠乏し、死体を収容する棺桶が葬儀屋にもなかった。やむなく書斎の書棚の板を使って棺桶を作った。占部は凶書を愛し、蔵書家として定評があったので、その本棚の板の中に納ったのは寧ろ本懐であったらうと、会葬者は話し合ったとのことである。

### 二 三代監督小泉信三

小泉信三は明治二十一年五月生れ、父信吉は慶應義塾で福沢に学び、二十年私立で初めて大学部創設のとき塾長となり、三田に住居した。従って小泉は慶應義塾塾長の子として三田の丘の上で生れた。慶應義塾における名門といわざるを得ない。父信吉は学生の騒動があつて二十三年三月塾をやめたが、二十七年十二月信三六歳のとき急逝した。信吉は横浜正金銀行の支配人であつたので、横浜に一家は住んでいたが、福沢にひきとられて再び三田の福沢邸内の

一棟に住んだ。福沢の歿したのは三十四年であるから、信三はまだ十三歳であった。福沢のいるうちは三田の丘から、丘下の御田小学校に通っていたが、福沢が死んで御田小学校をやめ、慶應の普通部二年に編入されたというのは、まことに奇妙である。何か福沢に考えがあつてのことであらうか。普通部から大学予科へ、予科から政治科へ、慶應義塾の一貫教育の道を順調にたどつた。この間、庭球のチャンピオンとなり、当時その方面では慶應に小泉ありと知られていた。

政治科に進んだのは福田徳三教授の講義を確実に聴けるからだそうで、四十三年卒業して教員になつたのも福田の推輓による。四十五年九月留学の命をうけ、大正五年三月帰国した。留学中の勉強振りは同時に英国にいた、後年の水上瀧太郎の小説「倫敦の宿」に多少脚色はされているが登場しており、小泉自身も晩年好んで随筆を書いたから良くわかる。初め独逸の伯林大学に学び、第一次大戦勃発のため退去して、ロンドンのケムブリッジに学んだ。そして円形の大読書室のあるブリチン・ミュウジウムに通つたという。毎日坐る椅子もきまつていたそうである。帰国の前年にはパリのソルボンヌ大学でも聴講した。帰国後、一年程病気で静養したが、回復後は精力的に勉強し、社会思想史の講座を担当した。震災を鎌倉でうけ、東京へ還つて十三年の春から麻布に住居した。この頃が小泉にとって学問がすすみ、生活に張りのある楽しい時代となつた。「麻布の洋館には春から秋の末まで数ヶ月しか住まなかつたが、私としては、その頃が最も自由な楽しい大学教授時代であつたように憶い起こされる。その時、私は年は三十六で健康にも漸く自信ができ、そうして慶應義塾の方は、一週数回の講義と研究指導をすれば、それ以外には何の義務もなく、社交も未だ忙しくなかつたから、毎日好きなこと許り出来るような身の上であつた。実際、その頃、私は学問の

コツというようなものが分りかけたように思う。頭の中にはテエマがいくらでも湧き、読んだり書いたりすることは、少しも苦にならないような気がした」(「わが住居」新文明昭和31・11)

この十三年一月に小泉は図書館監督になったのである。図書館の歴史からいえば、大震災後の後始末と占部が計画して突如身を引いた仕事を引継がされた格好となり、定めし気の重いことと思われるが、図書館のことはこの文に少しも触れていない。この文章ばかりでない。小泉全集は膨大であるが、慶應義塾図書館に関する記事はいたって少い。図書館を利用した記事は二三見られる。学生の時、福田ゼミで洋雑誌を大量に借り出し、その中の論文を分担して読まされたことや、留学から帰って病氣療養中、新築の図書館の本をせっせと読んだことなどは回想しているが、監督時代の思い出は、僅かに中国で共産党資料を買って図書館に納めた記事にカッとして、当時図書館の館長であったと記入しているばかりである。



小泉信三(昭和5年頃)

図書館の監督という職務はそれ程苦にならない、容易いものなのであろうか。その閲歴を見ると図書館監督時代が、学者として最も油の乗った時代であって、「近世社会思想史大要」「マルクシズムとボルシェヴィズム」「リカアドオ研究」「マルクス死後五十年」などの代表的著作が次々と発表された。そうした学問上の華々しさに比べて、図書館監督などの地味な仕事は後年の回想からは忘却されてしまったのであろうか。小泉の「私の履歴書」を見ると「ところが私はこうし

てゆっくり読んだり書いたりしていられない身の上になりました」それは昭和八年十一月に慶應の塾長になったからである。「ゆっくり読んだり書いたり」した時期が図書館監督を兼任した時にあたる。思い出すのは前の占部監督も図書館を去って理事となって、初めて激務についてたように述べた。ところが田中監督のときはそうでなかったらしい。慶應義塾創立九十年祭のとき、義塾物故者慰霊祭に参列した田中一貞未亡人は図書館に立寄って、田中監督を偲ばせるものが何一つないのを不満とされ、「田中は身も心も図書館の仕事に捧げた」と語られたが、どうも其処には大いな相違があるように思える。図書館の創設期には身も心も打込まねば出来なかつた監督の仕事も、建物が出来て軌道に乗れば、それ程、苦にならない役目であつたのかも知れない。いや、建物やその他の障害があつても、学校の財政的基礎が堅固であるかぎり、監督は重荷にならない。監督の努力は予算を獲得して良き蔵書の充実を期せば良く、蔵書の選択権を握っていることは、学者としては寧ろ愉快な仕事であつたと思われる。学部長などで教授間の調整に苦労するよりは、図書館で教授側から図書の入入れを頼まれ、購入すれば感謝される。配下に良き事務員がいれば楽しい役職であつたのかも知れない。

また次のようにも考えられる。図書館の学校内における重要性が極めて低かつた。大学における講義は学生の図書館利用を必要とせず済みますことが出来た。次代監督高橋誠一郎は昭和十三年四月の東京朝日新聞に「詰まる所、我が国人の間に読書慾乏しく、図書館利用の要求少なきに由るものであろう。啻に一般人士のみならず、最も読書と研究の暇の多い大学生の間においてすら、図書館利用者の少ないことは真に驚くばかりである。大学図書館の閲覧室が満員となるのは、一個年を通じて学年試験の前ばかりである。この時期に図書館の閲覧室を利用する者の多くは、勉強

の障碍の多い家庭や、下宿の自室を避けて邪魔の少い場所で、静かに教科書やノートの繙読をしたいという慾求に駆られる者であつて、彼れ等の中には一冊の参考書をすら借出していないものが、かなりある。」といつてゐる。卒業式の日、卒業証書を手におつてと図書館の受付にきて、内部を見せて下さいといふ。「一度も利用しませんでした。だが國へ帰つて話の材料に困りますから」と、笑ひ話も繰返されておこる。また教授達も当時は私蔵書の多きを以て誇りとし、図書館の本を利用することは比較的少なかつた。これは収入面の差違であつて、この節の教授達とかなり違ふところである。だから図書館は慶應義塾の看板だといつた人がいるが、それはなまけ者の極言ではあるが、大局的にいつてさうであつたかも知れない。美しい建物に、豊かな蔵書、価値ある貴観書の保管が大学図書館であつた。それは何も慶應に限らない、当時の大学図書館全般の傾向と思われる。

閲覧者―特に学生に対する閲覧利用への努力は少いといつてよかつた。大雑把にいって大学図書館は研究図書館が主であつたから、学生の閲覧は従であつた。けれども利用する者は多くの中の僅かな人数ではあつたが、殆んど常連であつて、その中から優れた学者や人材が輩出した。「学生のときの私は図書館を多く利用した方です」「毎日のように図書館へ行つて特別の便宜を図つて貰いました」といふ老教授もいる。自分は懶けものだったので授業には出ないで図書館へ通つたといふ小説家もいる。野坂参三なども利用した方である。社会主義に関する和書は禁閲だったが、洋書は自由に読めたといつてゐる。高学年になつて卒業論文には入りびたりになる学生もいた。図書館へ行けば必ずいた主<sup>か</sup>みたい<sup>な</sup>学生も多く数えることが出来る。図書館の圖書の利用廻転に汲々とし、さうでない図書館は倉庫だときめつける人もいるが、図書館の倉庫時代も確かにあつた。図書館員のいわば精鋭といわれる人は事務室にい

て、閲覧台には給仕の外は、出納の仕事は監督する人がいれば足りる。学生が図書を探すのに相談する人もなかった。書庫に入れる教職員は事務室を通らねば書庫へ入れなかった。そこには事務員の多くの目がある。書庫の入口には館長名で、図書館の図書は慶應義塾の貴重なる財産であるから大切にしていられ、という意味の文章が張られてあった。財産とあるからには一冊もなくしてはならない。館員はその財産を守る番人だという気分もあつたことも事実である。しかしいやがる学生の首を押えつけて無理に図書を読ませるのがいいのか、講義だけに満足しないで自発的に読書を楽しもうとする学生に、ゆつたりとした気分で勉強させる図書館がいいのか疑問である。しかし教育という以上、英才ばかりにかたよれない。読書に興味のない学生にも興味を湧き立たせる努力も必要であろう。どつちが優れているとはいえない。両方とも必要であろう。概して図書館の発達の初期は収書が中心であつて、利用への努力は収書努力に一応の基礎が出来てから活発になる。

小泉監督は自身何も語らないが、在任の十年は図書館史でも忘れ得ない数々のことを残した。小泉は教授兼任の片手間仕事であつたが、今日から見て監督としての功績は没することが出来ない。それを探念に発掘して行くこととしよう。

小泉監督の仕事には大きく分けて三つある。一は占部の残した洋書目録の完成であり、二には地震による災害の復旧と新書庫の増設、三には図書館蔵書の大幅なる充実である。監督に就任すると相談役会が先づ持たれる。ところが、初期の頃の相談役会の記録が見当らない。僅かに昭和三年十二月築地の錦水で行われた記事がある。それによると人数が大分増えている。三辺金蔵、幸田成友、占部百太郎、西村富三郎に加えて、西本辰之助、高城仙次郎、舟田

三郎、伊藤吉之助、川合貞一、小林澄兄が呼ばれている。会は年末の慰労会に等しく、平生どんな諮問をうけていたかわからない。恐らく図書選定の助言位にとどまっていたのであろう。

館内の事務員・雇員合同の事務打合せの相談会は、昭和二年二月から毎月開かれ、二年程続いたが先細りして消えた。小泉監督は努めて館員に接触しようとする事務員の食堂へ屢々顔を出したりしたが、古くからいる年老った人々は敬遠する傾があった。この頃のメンバーは就職の古さから云うと佐々木、岡崎、山木、安食、伊達、片倉（明）、楠山、国分、柳沢（徳鄰）、小池、高橋、加藤（元彦）、大村（武雄）、橋本（勝彦）、吉岡（紀道）の十五名で、安食が事務主任で、田中監督と同じ山形県鶴岡の人であることは既述した。この外に岡崎、国分、高橋も同郷、その他も田中の恩顧を蒙ったといつて良い人々で、年齢は小泉監督より上か、或は同じ位であった。これらの人々は団結という大げさだが、気が合っていたので、他からは「荘内閥」などと蔭口された。

そこで小泉が頼りとしたのは若手の事務員達であったようだ。それらは

田中千代松	理財科卒	大正十一・五〜大正十四・四	普通部教員へ
平井新	理財科卒	大正十三・四〜大正十五・四	高等部教員へ
加藤元彦	独文科卒	大正十四・四〜昭和十・四	予科教員へ
大村武雄	文学科卒	大正十四・四〜昭和五・十	退職
橋本勝彦	高等部卒	大正十五・四〜昭和十二・四	高等部教員へ
三辺清一郎	理財科卒	昭和五・二〜昭和廿一・一	退職

で、大学を卒業したばかり、年齢も十年程下であった。教員志望であったから短期間でやめ、既に在任中教員兼務の

人もいた。これらの人々を小泉は自宅に呼んだり、木曜会と称する集合に参加させたりして歓待し、彼らからも信頼をうけていた。

洋書目録は彼らの手によって完成された。占部監督当初の計画では大正十五年完成を目標としたが、原稿作成に従った恒松、田中、平井は次々に教職に去り、加藤、橋本、大村らが印刷に関係した。印刷所は震災後のこととて適当なところがなく決定が遅れ、京橋の三豊社と定まっていたから、図書校正に手間取り、又収蔵年代も二年延長の昭和二年迄としたため、原稿に加筆が多く、これも遅延を増長させた。その苦心を加藤は「何しろ大部の図書目録なので随分苦労しました。最初はこれ程の難事業とも考えておらず、短時間で出来ると思っていたのが、こんなに五年もかかり、頁数も予想の二倍にもなったのです。一番苦心したのは校正です。日本・支那を除いて凡百の国の言葉が出てくるので、普通の書籍雑誌の様に簡単には行かず、中には五校、六校まで取ったのがある程です」(「三田新聞」昭和4・12)と語っている。

発行は昭和四年十二月二十日。体裁は菊版、表紙はクロス張で、前面には図書館玄関正面の窓にペンの徽章を組合せた図案を金で入れたもので、本文は千七百一頁、索引二百十五頁の大冊となった。収録冊数五万、本文は分類目録で、同一分類の中は著者名順であった。索引は著者名よりする。金文字を入れた背皮製が上製で二百部、背が表紙と同様クロス製なのが並製で五百部造った。塾教員や有力者に配布したが、市販は価格七円であった。目録は評判が良かった。小泉宛の福田の手紙(小泉著「学窓雜記」)に

「此度は新刷図書館目録御恵送難有御礼申上候、願れば第一回の目録の時より第二回の目録を経て此度の目録に到

る、実に隔世の感あり、而して〇〇の目録すでに古く、××の目録は極めてみすほらしき著者別のものに過ぎず、我邦における洋書目録の最大最新なるものが学兄の下において完成せられ候事、慶祝此上なき事に御座候、これに付ても田中一貞君と東野利孝君とを追懐するを禁じ得ず候、さるにても義塾が此の大事業を成就し、其経費を甘諾し、また助手諸氏が献身的に働かれたる様想像に余あり、一面美しき協力の結実として我々の意を強するに足り申候、分類は田中君時代のものを共儘引つがれ候様拝見仕候、存外無理少く出来上り居る様に存候、誤植などの見当らざるは嬉しき限りに御座候」

福田徳三は昭和五年一月十七日慶應病院の中から、贈呈に対するこの礼状を書いた。「我邦における最大最新」のものと褒め、ゆくりなくも慶應義塾の教授であった頃の図書館の人々のことを回想している。福田は終りに「大したことでありませんから、必ず必ず御見まい下さらぬ様願上ます」と記したが、同年五月八日病歿した。田中監督時代の項で述べたように、教授の中でも福田は図書館に関心が深かった。図書を推薦したり、分類にも興味を持ったり、或はうるさ方に属したかも知れないが、図書館員でもあったことは確かである。最後の病床にこの目録が送りとどけられたことは幸いであったといわねばならない。

### 三 建物の復興と新書庫

小泉監督が就任して間もなく記されたと思われるものがある。岩波書店の便箋に

「一 大学学生数及び授業料収入と図書購入費額との比例を調査すること

一 応急危険予防設備をなすこと（緊急を要す）

一 書庫増築と本館修繕との先後の得失を研究すること

一 館内売店の位置及び学生出入口に関する件」

と記されてある。当時の事務主任であった安食使用のノートに挿み込まれていたから、安食に手渡されたものである。小泉がさし当って為すべきこと、知っておくべきことのメモと思われるから、以下これに従って記述して行く。これに対して安食がどう解答したかはわからない。ただそのノートに他の大学図書館との比較が記されているのは、それに対する検討が重ねられていたといえる。例えば大正十三年立教大学調査という表がある。

各図書館蔵書数及購入費其他

	和漢書	洋書	計	図書購入費	一日ノ生徒総数に對する 閲覧人の割合	備考
立教	二、八一〇	一七、二四〇	二〇、〇五〇	九九〇円	五〇人	六・六七
早稲田	二二五、〇〇〇	七三、一〇二	二九八、一〇二	不明	一、〇〇〇	三・三七
慶應	六九、一五五	三七、八五六	一〇七、〇一一	一〇、〇〇〇	二五〇	四・一七
商大	一一、七七三	八七、二七一	九九、〇四四	二二、〇〇〇	三〇〇	二・〇七
法政	四、九九九	五、五〇〇	一〇、四七九	五、〇〇〇	一〇〇	四・七〇

図書館に関する統計が不備であった当時では小泉監督の要求されるようなものを完全に示すことは困難であったであろう。以上の表は学生数、授業料がわかっていれば、その比例を見つけて出すのに幾分の貢献は出来たであらう。こうした数字上での他館との比較は安食ノートに屢々記されている。特に早稲田大学図書館との設備上の比較は丹念に行

われている。小泉監督の念頭には他館との対比が常にあつて、安食に諮問する。これは多分その準備だと推測される。

第二項目以下は安食の用意した資料が見つからないので、其後実施されたことから推測するより仕方がない。大震災による建物の損害は約二十万円と見積られたが、亀裂を生じたのみで倒壊に至らなかったので、その部分の応急措置で当座を弥縫することになった。十三年三月の評議員会で震災に因る建物応急仮修繕工事費四千三百五十円が可決され、十四年にかけて修覆が行われた。その間二つの予備室を閉鎖し、大閲覧室も三分の一が使用を禁ぜられた。前述したように地震による被害は建物の向つて右側に被害が大きく、書庫及び書庫寄りの方は堅固であつた。従つて以上のような措置がとられたのである。予備室の閉鎖は展覧会の開催を不可能にし、閲覧室の縮少は試験時の学生に不便をかけた。

応急修理の実施中にも、この建物の永続が可能かどうかの精密な検査が行われたらしい。検査の結果如何によつては今のを取毀し、全く新しい図書館を建てねばならぬかも知れない。その時、どんな建物が良いか、研究しておくと小泉監督は加藤事務員に語つたという。加藤の回想によると「私はすっかり興味をもつて、外国の材料なども参考にして相当大的な夢を持ってプランを考えた。経済上、最初から大きな物が無理ならば逐次増築が可能であるようなものであること。財政上決して豊かでない私立大学であるから、図書館と研究室とが同一の書籍を何部も買うことは無駄なことであると思われるので、両者のつながりに十分な考慮を払うこと、これなどが私のアイデアの二三であつた。しかし幸か不幸か、鉄骨を入れれば修復可能という結論が出て、書庫一棟増築することでこの夢は消えてしまつた」(三田評論六五二号)

書庫増築の必要は小泉監督就任の初めから考えられたことらしい。創立五十週年記念図書館は竣工当時、蔵書二十万冊を入れると聞いていたが、実際に使用して見ると書庫延坪三百三十八坪四合で、収容冊数は十五万冊と数えられた。そして小泉就任の頃の蔵書は十二万冊を突破している。新書庫増築は不可欠とされた。田中監督は新図書館の設計に当って、一時に大書庫を造るの不経済を説き、図書増加と共に書庫を拡大し得るよう、その余地と設備を考慮されていた。田中時代は書庫に隣合せる西側には木造の寄宿舎があり、北側には旧幼稚舎の木造建築があったが、それらを取払って第二、第三の書庫を造ることを考えていた。ところがそれから十三年たつと、建物事情が一変した。図書館の西側に万里の長城のように連らなっていた寄宿舎は広尾へ移転してなくなり、その跡は西からいって大正七年竣工の木造二階建の医学科予科校舎、つぎに大正九年落成の鉄筋コンクリート三階建の大学予科校舎とが建ち、予科校舎と図書館の間に十間の空地が残されていた。その空地も大地震による塾監局の煉瓦建物が使用出来なくなった影響で、鉄骨組立式の仮教室、平屋建七十四坪が十三年四月作られた。だがこれは何時でも取払うことが出来た。旧幼稚舎の木造建築は白亜館と呼ばれ、学生のホールになっていた。極端に古くなって、学生が上下するたびにきしむような音をたてた。これも毀そうと思えばいつでも取り除けた。蔵書充実に熱意のある小泉監督は是が非でも新書庫の増築を実現したかった。

書庫増築案には二案考えられた。第一案は仮教室を取払って、鉄筋コンクリート建、張り煉瓦、四階に、地下室及天井裏を設け、外観は是れ迄の書庫に並び同一であった。地下室も天井裏も書庫にして延六百坪、収容冊数二十五万冊とする。第二案は鉄筋コンクリート建五階に地下室を設け、外形は予科校舎と同様のものとし、将来上階に二層増

築し得るよう基礎工事を堅固にする。七階完成の上は延坪が現在書庫と同等となり、優に十五万冊を入れ得るといふから、この第二案は地坪五十坪である。思うに仮校舎はその儘にして学生ホールを毀して建てる案であらうか。従つて外観も裏側だからということゝ粗末にしたのかも知れない。しかし結局縮少された第一案が採用された。

書庫増築と本館修繕との先後の得失は、本館の一时的弥縫が出来たので書庫から初められた。大地震による復旧工事のための塾債募集は大正十三年三月に三十四万五千六百円と予定金額を超えたが、實際払込まれたものは二十五万余円と予定に達しなかつたので、引続き努力が払われた。その間にも工事は着々と進められた。教室の不足を補う仮校舎、塾監の煉瓦館が全く使用にたえなくなつて取毀しのため、演説館の稲荷山への移転、次で大講堂の修築完了、そして現在の塾監局の完成、それは大正十五年九月であつた。最後が図書館で書庫増築のための予算は

「一金約八万円也 書庫増築費概算

内

金七万三千八百五十円 増築費 延坪二一一坪  
坪当三五〇円ノ割

金五千円 設計及設備費

金壹千円 予備費及雜費

計金七万九千八百五十円也」

七年完済の利率年八分五厘の借入金を以てすると、七月二十日の評議員会で可決された。本館の本格的修築もすぐ必要なため十二月二十一日、金十六万円、その支出は塾債残額を主とし、不足分は十五、六年度の經常支出を節約して

捻出すると定まった。兩評議員会には小泉監督も特に出席し、現状の説明とその必要を力説し、承認されるところとなった。

兩者合しての工事請負入札の結果は、最低見積が清水組の十八万四千九百四円五十銭（附帯工事を除く）であったので、設計の中条技師と精審の結果、清水組が取かることになった。書庫は翌昭和二年一月四日着工、八月五日竣工した。ゴシック式鉄骨鉄筋コンクリート四階建、地階及び屋階があり建坪五十三坪、延坪二百六十八坪五合五勺であった。外観は田中監督のたてた書庫と全く同じであったが、内面は書庫を広くするために廊下を以て小部屋に区切ることなく、一層一室で、その点、防火に意を用いた田中と考えを異にしたといわねばならない。しかし建築の進歩から、屋根もコンクリート造りでスレートを張ったことは木造屋根の古い書庫と違っていた。

図書館本館の本格的修築は新書庫の落成をまって、昭和二年八月十九日から着手された。その完成までは新しく出来た書庫が本館の代用に使われた。新書庫は将来再び増築する第三書庫との連絡を考えて、北側の各階に出入口が設けられていたが、その地階が閲覧者の出入口となった。地階に受付があり、食堂、小使室、物置があった。閲覧者は旧書庫と新書庫との間の階段を使って上へ登る。一階に事務室があり、二、三階が閲覧室で、二階閲覧室の壁ぎわにカード目録があり、二階階段の上りフロアに出納台があった。書庫としてたてられたものだから、天井が低く暗い。しかしこれも一時のことと学生もあきらめて文句をいうものもなかった。困ったのはスチームが無いことだった。図書館では火鉢を所々においたが、書庫の構造の上でからか、現在スチームが所々にあっても寒いのである。堪ったものではない。外套の襟を立てて机にしがみついて本を読んだ。

本館の工事は八角塔の上半分を切りとって、付け替えるという大工事ではぼ一年かかり、昭和三年八月二十五日に落成した。全く元の通りというのではなく、閲覧室を広くするために出納台の両側の目録箱を予備室に移し、その跡は新聞雑誌乃至特別書の閲覧場所に改めた。かくすることで閲覧室を静かにし、座席も二十四増加し得た。閲覧室の読書机の衝立てに、福沢諭吉の西洋事情や世界国尽し等、代表作の版木をはめ込んで、学生には遠くなった塾祖福沢を偲ばせる工夫をしたのも面白い考えであった。階段にキルクの粉末を加工して音を消したり、便所を汲取式から水洗に改めたのもこの時の変化である。

学生は図書館の復旧落成の日を待ち望んでいたが、利用されるより前に問題が起った。昭和三年一月から学生の図書館入館手続に変更があった。従来は授業料の領収証と引換えに年間を通しての図書館入館券が渡されたが、学期毎に授業料の納入がないうちは認められなくなった。「当局の心を疑う」と題して三田新聞は「若し大学に図書館が無かったらその価値は半減する……塾当局の無慈悲なる手は貧困なる学生からこの信頼していた図書館を奪い去ってしまった」と非難した。当局としては授業料の未納を防ぐ方法として自然に考えられる手段であった。学生側の不平は尾を引いて、翌四年十一月の予科会主催第一回全委員会にも真先きに採りあげられ、「入館券と授業料を全く切離して、身分証明書あるものには入館券をあたえよ」と提案した。この結末はわかっていない。多分安食主任が三田新聞に「特に貧困な学生に対しては授業料を期日迄に納めなくとも、共済会長増井(幸雄)さんか誰かの証明があれば入館させる」と語ったので、折合ったのかも知れない。その後の三田新聞にはこれに関する記事は全く見出されなくなったから。



増築完成後の図書館

図書館内に売店を開かせて呉れという願は十二年一月十八日からあった。塾出身で北海道炭鉱に勤務していた秋山某が死んで、その未亡人救済のために、元同僚であり当時医学部で会計課長をしていた倉井忠が奔走し、資金は友人福沢桃介が出そうという義侠の企てであった。十二年は大地震があつて具体化されず、小泉監督のときになって

「入館者及一般塾生のため、売店設置の必要を認む。但し販売品はパン、菓子、牛乳、コーヒ、紅茶類にして現場にて調理煮炊をせざるものに限る。使用人については図書館係員の指定に従ふこと。」

と好意を持って採り上げられ、その位置が安食主任に諮問された。入館者計りでなく、一般塾生の便宜にもなるようにとの考慮もあつて、地階の新聞製本室を潰して小さな売店を作った。新聞は次の広間の一隅に移し、製本は出張して来た製本屋が独立店を持ったので、それに外注することになった。学生の出入口を片寄らせて、館内閲覧者ばかり

でなく、一般塾生も利用出来るよう工夫された。品のよい未亡人と小娘が従業員で学生に親しまれた。小泉はそのころ、慶應義塾は男の学校であるから、女子はなるべく使わない方がよい。己む無く使う場合は、胸を下キッとさせない婦人が良いと平生語っていたが、そこへ秋山未亡人が毎日来ることになった。未亡人は四十歳台か、老けて見えたので学生にはおばさんとしか目に映らなかったが、図書館事務員小池益郎にはドキッとさせるものがあったて、監督の平生の言葉に似合わないといったそうである。

そして何時の頃か、ライスカレーが販売品目の中に加えられた。調理煮炊は禁ぜられてる筈であったが、館員と馴染むとなると断わり切れない。しかも營業的に好結果を生むとなると、未亡人の親類と称する男子が手伝いに来て、昭和の十年代になると支那ソバを手がけるという風に拡大された。食堂は戦災で図書館が焼ける二十年の春まで続いた。食糧が戦争で配給されるようになり、売るものが無くなり、しまいには乾燥バナナなどを並べた。すべてが不足していた時代なので、学生や教職員までがならんでそれを買ったりした。

三田山上の婦人の話が出たので婦人従業員について触れておく。大正八年から十二年にかけて飛川つるえという老掃除婦がいた。毎日書架の棚を次々に拭いていた。婦人タイピストが置かれたのは大正十五年町田はる子が初めてであった。又その頃、和漢書図書日録の筆耕に婦人を備ったので、若い婦人の姿も数名いつも目につくようになった。目慣れてくれば小泉監督の考えも変わるものか、だんだん美人タイピストが採用された。昭和初期の彼女達は三田の塾生ばかりでなく、街の若い者からもさわがれた。こうした美人も段々伝説的存在になる。「大したことはない。薬師寺の像に似ていた」などと回顧する人もいる。タイピストもこの頃は英文で、邦文タイプが採用されたのは次の高橋監

督時代である。

小泉監督の図書収集の苦心を語るに先立って、田中監督の力齋を入れた展覧会のことを述べて置こう。予備室が地震によって使用できなくなり展覧会は永く開かれなかった。それが開かれたのは昭和六年十一月に福沢先生伝記完成記念のためのもので、資料六百余点、大閱覧室を会場に当てた。福沢諭吉伝は大正十二年九月に初まる。福沢晩年の側近であり、文章の上で福沢に最も気に入られていたという石河幹明が編纂主任に選ばれ、図書館内の一室を編纂室にしてゐた。石河は安政六年生れの高齢で、功程半ばにして眼を病み、視力衰えて執筆に困難する程であつたが、一日も休むことなく精勵するのを見て敬服せざるものはなかつた。小泉は時々室を訪れ飲談し、或る時は休息にと長いソファを贈つて慰めた。「小泉の先代（信吉）は少しキザであつたが、息子は仲々良い」と石河も小泉を褒めた。展覧会は翌七年五月創立七十五年記念式典に合せて「西洋経済思想史展覧会」が開かれた。同月「百年祭記念ゲート展覧会」、翌八年六月には「星亨三十三回忌記念遺書展」が催された。

#### 四 小泉監督の図書収集

小泉は塾長になってから大学の近況という記事を毎年一回「三田評論」に掲載しているが、監督時代にも同誌の八月号義塾の近況の中に、図書館のその一年を紹介している。この近況によつて小泉が図書館で何に力を入れていたかがわかつて都合がよい。

大正十三年八月号には「本館は常に入館人員の多きを計るのみならず、内容の充実を期し、年々購入費を増額し、

教授諸氏の助言により良書の購入に努めつつあり、最近購入の上整理済みのもの、又目下注文を發してその一部到着せるものの中、大部のもの二三を挙ぐれば左の如し」といって、四部叢刊二千冊、道藏千二百冊、*Philosophische Bibliothek*, *Parliamentary Debates 1066-1919* 八百十二冊、十七世紀經濟学古文書百冊、*Haensch Bibliothek* をあげている。このうち小泉が手がけたものは最後のK・ヘーニシュの蔵書購入である。ヘーニシュは独逸民主党の領袖で、文部大臣を勤めた人である。その蔵書一万冊は主として社会問題関係の小冊子及び雜誌類であつて、留学中の加田哲二がこれを吟味し、十三年十月追加予算五千四百五十円で購入が決定された。庄巻はカウツキの創刊した雜誌「新時代」*Die Neue Zeit 1883-1920* の揃などは文献価値の高いものといえよう。パリアメント・デベートは占部監督の注文したもの。四部叢刊は東洋史の講義を持つ学校には必需のもので別に異とするに足りないが、道藏は道教の一切経で何処の図書館にでもあるというものではなからう。共に上海の商務印書館から当時出版されたものである。独逸哲学叢書は千八百年末から継続出版されていたもので、この時揃で約百冊納入された。十七世紀經濟学古文書というのは根津基金で購入した英国の重商主義に関する文献で、必ずしも十七世紀に限定されていたわけではなく、十八、九世紀のものもある。内容はマリインの「英国の癡」、カルペニアの「利率引下の諸利益を示す一論」、チャイルドの「貿易新論」、ベラーズの「産業の学院」、ダヴェナントの「英国の公収入及び貿易に関する論稿」その他、ピットやデフォオのものなどを含む。

大正末年、図書館の復旧、書庫増設のごたごたしていた間は、主として雑誌の充実に努めたようである。 *Revue d'economie politique 1887* — *Archiv für Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung 1911* — *Archiv für*

Sozialwissenschaft und Sozialpolitik 1888 — Zeitschrift des Vereins für Volkskunde 1891 — Entscheidungen des Reichsgerichts in Civilsachen 1880 — 昭和初年には Kant Studien Zeitschrift für de Gesamte Staatswissenschaft 1844 — Bulletin de l'ecole française それに阿部基金によって保険専門雑誌が数種選ばれた。雑誌でない大部のものにはレクラムの「世界文庫」三百冊が到着した。

以上が大正末年迄の主な図書購入で、寄贈のものには十三年十一月に和田豊治遺蔵四百五十九冊、十五年十一月に和田三郎遺蔵五百六十余冊があった。特種なものでは法学部学生矢野国太郎収集の十六、七世紀出版のラテン文書籍三十九冊がある。プラトンのラテン語訳集、テレンティウスの喜劇詩、その他アリストテレス、ホラティウス、ストラポの書などを含む。羊皮などを表紙に用いた荘重な感じのする大型本である。利子によって図書購入の基金の寄附には十三年三月岩永省一記念一万円がある。範圍を海運・交通に関する図書と限定され、主として増井幸雄教授が選書した。十五年には三神敬長、宮永万吉記念として四千五百余円が寄附され、主として南洋関係文献が選ばれた。基金による最大なものは十五年九月望月軍四郎による十万円であって、それは後述するであろう。

三田評論の義塾の近況は昭和六年まで続けられたが、其後は編輯方針が変わったのか、図書館の年次報告などは数字のみあげた無味乾燥なものになった。ところがこの頃こそ、図書館の復興も成り、監督としての小泉の最も油の乗った時期に入る。良書の収集には全力をあげた。小泉の最も得意とする社会主義、社会問題に関する図書の収集には、若い助手を相談相手とし、小泉自身が卒先して外国の古書肆のカタログから選択した。昭和五年ベルリンのフーゴ・シュトライスンドへ三千八百マルクで注文した六十余冊の図書にはマルクスのものでは「仏蘭西における階級闘争」

「ブルメール十八日」「経済学批判」「巴里コンミュン」など、エンゲルスものには「フオイエルバッハ論」「反デューリング論」「空想より科学への社会主義の発展」「ドイツ農民戦争」がある。その外にはリーブ・クネヒトの「カール・マルクス追憶」やリスト、ロツク、クリースの古版本なども含まれていた。マルクスの名著「資本論」は第一巻だけの端本であったが、これは昭和七年、全巻揃でスイス書籍販売取次店から購入し得た。

この方面の文献収集は此処で一纏めにして述べよう。現在共産党の野坂参三は第一回小泉研究会の出身である。中学時代から社会主義に興味を持ち、大学の選択には社会政策の講座があるという理由で慶應へ入学した。留学から帰国したばかりの小泉から英文の共産党宣言を借りて、一日で写し、自身の方向を定めたと言っている。早くから実運動に入り、獄に入ることも屢々であったが、昭和五年眼を病い、治療のため仮出獄した。その費用捻出のために自分の蔵書を図書館に持参して買って貰った。その中にはオーエンの「自叙伝」や、ブレイの「労働の不当な処遇とその救済策」、マカロック版のリカルド全集、その他カウツキイ、ベルンスタイン、ヒルファディングなどマルクス以後の代表的なもの、英国の労働協同組合史文献、スチルナー、クロボトキンなどの無政府主義文献などの、代表的なものがあった。国分剛二の回想では最後の支払のときには、竜子夫人が姿を見せたという。野坂夫妻が潜行して入露したのはそれから間もないことであったという。本を売りに来たのは野坂ばかりではない。左翼関係の人がよく来た。子供を背負って来る女の人もいた。それらから買うのは東京では大原社会問題研究所か、慶應図書館位であったという。戦前こうしたことを口外することは禁物であった。勿論印刷されたこともない。

資本論の完訳を日本で初めて出した高島素之の旧蔵百八十四冊が寄附されたのは七年六月であった。ウイリアム・

モリスの「社会主義」ホブソンの「近代資本主義の発展」それに福田徳三自署のある「日本における社会的経済的発達」(独文)などが目につく。マルクスの著書及びその研究に関する英・独書や独逸社会民主党の著作が多いようである。

社会問題以外で纏った収書を二三あげる。三年にはオックスフォード大学編の *Early English Text Society Publications* Original Ser. 百二十六冊 Extra Ser. 百冊が小幡先生記念基金で購入された。英国の古典研究には欠かせないものだが、目録作製が面倒で整理は遅れた。翌四年にはゲーテのワイマール版百四十三冊が購入された。昭和七年はゲーテ歿後百年に当るので、丸善などの洋書店はそれを当てこんでゲーテ本を努めて輸入した。小泉は加藤元彦に「図書館の蔵書は経済に関してはまあまあだが、哲学や文学の方面は見られたものではないだろう。大いに買え」と激励した。事実「少くとも私と関係ある独逸文学書についてだけいって見ても、個人の蔵書と等しいか、それよりも貧弱でないかとさえ思える程であった」という。加藤は思い切って随分買い漁った。小泉は金のこととは心配するなど購入した本を見せる度に言ったが、加藤の恩師である茅野儀太郎教授は気が小さくて、ハラハラしながらその位にしろ、いい加減でやめると気をもんだそうである。ワイマール版はこの時の購入である。ぐんと変わったものに七年から八年にかけて徳川時代の草双紙、合巻類が高橋誠一郎教授の紹介で大量購入された。この頃の和装本の選択は安食主任がやっていたが、間々春本などが含まれるのを見て、高橋は小泉に注意したそうである。偶々、平六堂古書店が京城帝国大学へ草双紙を納入した後、再び集めているという話を聞き、「こんなものがあるが、どうか」と小泉に話したのが実だったので、本は欠巻の少い、美本揃であった。其後黄表紙類にも及んだが、外題も揃った完全なものとい

うことで収集には苦心があった。春本の購入というとか安食主任が卑しいように思われようが、一と頃風俗資料として収集された時期があったとは、図書館界の古老から聞かされたことがある。

昭和五年、小山内薫旧蔵、洋四千冊、和漢二千冊、計六千冊が購入された。早大と東京帝大も触手をのばしていたが、水上瀧太郎・水木京太の斡旋で塾の手に入った。価格は二万円で、一万円は臨時費として塾当局に支出して貰い、残りの一万円を福沢桃介、加藤武男、小林一三、高橋正彦、朝吹常吉、阿部章蔵、平田篤次郎、松永安左衛門、日比谷平吉と小野哲郎が分担して出した。小山内の永年にわたる近代演劇に関する収集なので、「小山内文庫」と名付け一括し、語学別に和、英、独、仏、其他とし、その中を小説・戯曲・演劇・その他の順にする整理方法を採用した。

小山内は演劇の上演の際など、参考に図書を俳優に貸したが、借りて返さぬ者がいて、全集ものなどに欠巻が一冊二冊あって惜まれた。小山内が本を大切にすることは息子の喬が「父の書齋」という本の中で語っている。偶々近所に失火があったとき、外出から駆け戻った小山内は消火夫が自分の本を二階から投げおろすのを見て、顔をきつとあげて、「投げる位なら本をいぢらないで呉れ」と怒鳴ったという。それ程大切にされた本を借りて返さない人がいる。世の中には不徳義な人がいる。図書館の仕事を永くしているとそれに類した人の行為が目について仕様がなない。

昭和六年には堀江掃一蔵書が有志の寄附募集で購入された。また「福沢文庫」が創設された。それは学生の修養団体に養真会というものがあつた。今でいえば合気道に類するものであつたが、単なる修養団体ではつまらない。思想的バックボーンがほしいということから、福沢研究ということになり、福沢及びその門下の図書の収集にまで発展した。偶々滝本誠一教授が福沢本を多く所蔵していたので、それを貰い受け、買増すことになった。資金は図書館が出

し、集った本は図書館に入れるということであった。収書は東京のみならず、関西まで手を延すことになった。滝本教授が学生をつれて出かけられたが「滝本先生は一諸に行っても、口で古本屋の所在を教え、先輩の家へ行かせたりするが、御自身は一步も外へ出ない。後で考えると大阪に愛人がおられて、先生はそれが目的であったようだ」とはその時学生で同伴した山本敏夫教授の話である。

ここで「望月文庫」のことを話そう。望月軍四郎はこれ迄も慶應に数々の寄附をしているので、日吉校舎建設のための寄附を求めるつもりで、昵懇の小林澄兄教授が勧誘に出かけたが、望月はそれにはのらないで支那研究講座の設置をすすめた。望月はその前年中国を旅行し、中日親善の必要を感じ、米国にはハーバート大学他にも支那講座があつて業績を残しているのに、隣国である日本にそれが無いのを残念に思い、早大には東亜経済講座創設のため五万円を、慶應には十万円を寄附しようというのである。そこで直ちに「望月支那研究基金規程」が定められ、科外講座、中国語講習、中国視察費補助、中国研究奨学金、中国文献の収集が企てられた。中国に関する文献購入は及川恒忠教授が主任となり選択し、「望月文庫」と名付けて図書館に収蔵した。国民政府の各種公報類や中国の時局物に重点が置かれたが、広東・広西・湖南といった通志類や袁世凱時代の北京政府財政部編の「財政説明書」など、特種なものも成り購入した。これらは本郷にあつた文求堂書店の協力なくしては収集が出来なかつた。時には予定額を超え、借金を重ねたが、文求堂は黙って次々と届けてくれた。文求堂との関係が深くなり、同時に橋本増吉・前川三郎・加藤繁など中国関係の教授の援助もあつて「望月文庫」以外にも中国書が多くなつたのはこの時期である。「大清会典」四百九十五冊、通典・通志などの所謂「九通」一千冊、「御選四朝詩」百五十六冊などその一部である。京城

大学刊の「李朝実録」三百七十六冊も収蔵された。

かてて加えて昭和八年、中国関係の史籍の多い「田中文庫」が収蔵された。原蔵田中幸一郎博士は塾の誇る東洋学者であったが、大正十二年新潟で遊泳中急逝された。生地は静岡県田方郡函南村であったが、東海道熱海線の建設のため、強制的に買収された土地代金で図書を買収、その蔵書二万に達した。ライデン出版の東洋学雑誌「通報」の大揃など貴重である。又、外見は騰写版の貧弱な小冊子の群れのようなだが、中国共産党に関する資料として唯一無二とあって良い資料が、昭和四年小泉監督から寄附された。その前年、小泉が中国旅行の際上海で手に入れたものである。国共分裂の当時の中国にあって、潜行した共産党の資料を得るのはむづかしい。相手方は拳銃を机上に置き、周産党の研究が盛んになると欠かせないものとして、複製されたりした。

「望月文庫」を初めとする中国関係書の豊富さは塾図書館の誇りでもある。米中関係の正常化されない現在、米国の中国研究は盛んである。中国研究にはモリソン文庫を包蔵する国会図書館支部東洋文庫の見学は欠かせない。米国の中国研究家は東洋文庫へ勉強しに来る。そして東京で東洋文庫に継ぐ中国文献を持つところは何処かと問われると、それは慶應の図書館だと答えるそうである。米人のみならず、台湾の人も来る。最近では中蘇関係の研究などをするには、豊富な収集を誇る米国でも、戦前の発行著作には及ばないらしい。「望月文庫」の蔵書が珍重される。

最後にこの頃の寄贈図書中大部のもの、異色なものを紹介しよう。三年に福沢捨次郎遺蔵二千二百余冊、四年に朝吹英二遺蔵千六百四十三冊（国文学や茶道書が多い）、波多野承五郎遺蔵二千六百六十八冊、五年に成瀬正恭遺蔵千五百

五十九冊、森田寛藏遺蔵八百冊、六年には沢木四方吉遺蔵六百八十冊（美術・美学史が多い）七年には小田切万寿之助より九百七十冊（万寿之助の父盛徳旧蔵の「國憲」草稿や江藤新平の署名ある「民法第一人事編」など明治初期法制関係の資料が多い）八年には成瀬義春遺蔵千余冊が寄贈された。個々の貴観書として昭和二年蘭領印度のローマー博士よりクルムスのターフェル・フナトミカがある。杉田玄白の「解体新書」の原書としてかねてから所蔵を希望していたもので、秦佐八郎医学博士の斡旋によった。同年、名古屋の安藤次郎からウエーランドの經濟書の寄贈を得た。「福沢氏「図書記」の朱印のある、まさしく第二回の渡米のとき福沢が持返った本で、上野の戦争の最中に福沢が講義していたという由緒ある本であるにも拘らず、散佚されて塾には一本もなかったものであったので喜びも大きかった。これは尾佐竹猛博士の仲介による。五年には木村喜数日記がその子息浩吉から寄贈された。福沢は明治前にはこの人に恩顧を蒙ることが多く、その日記は福沢研究には欠かせない資料である。

小泉監督の図書館在任時期の大正十三年から昭和八年の間は、社会不安の顕著な時期であって、第一次大戦後の不況から大震災、次いで銀行恐慌から滿洲事変への突入となり、その克服のため左右両翼の思想が激突し、混乱状態といた。その中から思想の国家統制が徐々に進行して行つた。まだ読書の統制や圖書の没収などの強行手段は行われなかったが、研究の殿堂図書館にもひたひたとおしよせる波が感ぜられた。社会主義、社会問題の図書でも公然と購入出来ないものもあつたことは前にも述べた。また刑事に追われる人への便宜にもはばかりがあつた。「日本資本主義發達史」の刊行で名声を得た野呂栄太郎は小泉門下の逸材であつたが、大正十四年四月陸軍現役将校学校配属令の公布で、学内の軍事教練が始められるのを反対して検束され、十五年には京大事件に関連して検束されるという風に

学生時代から警察の注意人物であった。既に共産主義に共鳴し、小泉の講義には屢々立って反論を試みたりしたが、小泉は野呂を愛し、卒業後は助手に推薦する程であった。資本主義發達史の執筆の際にも「先生（小泉）は私に野呂が何か調べたいことがあるらしい。図書館へ君をたずねてくるかも知れないから、その時は頼むとそっといわれた。その後彼が来た時、その頃は教員の読書室であった玄関を入れて右側の部屋へ招き入れ、彼の便を計った」と加藤は語っている。野呂は図書館や塾に迷惑のかかるのを恐れて、人目につかない所で立ったまま頁をくったりしていた。

野呂の謙讓な態度は他の館員にも好感を持たれ、殊に橋本勝彦はソビエツト經濟の研究をしていたので、思想的にも近く、野呂を書庫内に入れ閲覧させ、館外貸出の便も図った。日本の古い時代の知識に乏しかった野呂は、橋本に頼んで滝本教授から聞いて貰ったり、館員固分に資料を探して貰ったりしたということである。



図書館を出られる秩父宮 先導は林塾長

他方、滿洲事變の發生以来、英米に対する猜疑が強くなる。七年五月創立七十五年記念式典へ秩父宮が参列されたが、それに併せて開かれていた西洋經濟思想史展にも案内されて見て廻られたが、宮はただ一語、「英國

の本が多いですね」といわれた。「思い過しかも知れないが、殿下のお顔には幾分御不満、御不快の色が漂っていたように感じられた」とは説明申上げた高橋教授の感想である。その時、古い塾出身の首相犬養毅も出席していたが、その宴席の中の写真が犬養の生前最後の遺影となった。その日から六日目の五月十五日犬養は蜂起した軍人の一団に射殺された。そして同年十月アジア協会図書の委託解約があった。日独会館が独逸大使館脇に建設されるからであったが、何を感じ違ひしてかその数日後、憲兵隊本部特高陸軍憲兵曹長和田喜代治が館を訪れた。詳細は記録された日誌にもないのでわかり兼ねるが、押し寄せる初期の梵音ともいえようか。協会図書の返還は翌八年六月完済された。

## 五 四代監督高橋誠一郎

昭和八年十一月林塾長の任期が切れて、後任には小泉信三が選ばれた。評議員会の選挙によるものであるが、それは評議員会中の有力者の意見が通ることが多く、この時の改選は日吉キャンパス建設のための三百万円の資金募集を成功させるため、清新なる人材を以てしたいという要望から、鎌田・門野の両長老の一致した推薦によって四十五歳の若い小泉が当選した。それを補佐する常任理事には堀内輝美と槇智雄が就任した。

小泉の塾長就任にともない、図書館監督の後任には高橋誠一郎が押された。高橋は明治四十一年の政治科卒業であるから、小泉より二年先輩で、留学も、大学教授としての講義も、小泉より早かったのであるが、明治四十四年十二月より当時難治と称せられた結核にかかって、留学中の大部分はサナトリウムで治療に明けくれ、帰国後も健康上の理由から都心を離れた大磯に生活して、読み且つ書くの業に費し、半ばは上京して講義する生活をつづけ、そして昭

和八年図書館監督になったのである。高橋が突然咯血して結核を自覚したのは、明治四十四年十二月十八日の夕方であった。サウス・ケンシントンのインピリアルインスチチュートのなかにあるロンドン大学のヘッド・クォーターに属する図書館で十八世紀の古書を繙いているとき、突然激しい咳に襲われ、何か喉から出たようなのでハンカチにとって見ると血であった。驚いて洗面所に駆けこみ、洗盤ベイスンに向って思うさま血を吐いた。そして閲覧室に帰って中年の館員に本を返えし、軽く会釈して出ようとするとき、館員が軽く咳を二つ三つしたのに気が附いた。「おれも肺病になつたら図書館員になつて一生読書を続けよう」と冗談半分に考えて往來に出たという。それは一九一一年、それから二十二年たった一九三三年の十二月一日、母校の図書館監督に就任したのであった。

高橋の家は明治年代まで十四代続いた新潟の廻船問屋津軽屋次郎左衛門という旧家であつたが、父の時代に没落して横浜に出て、貿易を営む茂木商店に身を寄せた。息子の高橋は四歳のとき呼びまかえられて、それからずっと横浜で生活したが、明治三十一年普通部に入學してから寄宿舎生活に入った。丁度その頃は福沢諭吉が第一回の大患の後であつたので、足ならしに朝の散歩に出かけ、学生・先輩がその驥尾に付して麻布広尾界限をゾロゾロ歩いた。高橋はその中の常連でもあつたし、福沢家の三男三八、四男大四郎、孫の中村愛作などと友達となつて、毎日のように福沢家に遊びに行つて、晩年の福沢に親炙した。悪戯がすぎて「途方もない馬鹿野郎だ」とどなられたこともあつたという。

小泉信三もその頃は三田に住んでいて福沢の若い人達とは遊び仲間だつたようだ。けれども高橋とはあまり接触していない。二年の隔たりが、そうしたのかも知れないが、高橋は学生自治会の機関雑誌「三田評論」に三十二年から

投稿し、普通部四年の頃には編輯を担当し、巻頭の論説は毎号書かされたという。「三田評論」は創刊当初より、義塾当局に対して抗争的であり、匿名論文は屢々編輯責任者への詰問となった。また高橋自身も辛辣な批判を掲載してはばからなかった。そこへ行くと小泉は坊ちゃんであり、好きな庭球も勉強のために放棄するという優等生ぶりであった。小泉の庭球に対して高橋の水泳は在学時代から部内で名人といわれた。そのころは学校間に競泳がなく、専ら遠泳が行われたが、葉山逗子間、葉山鎌倉間、葉山江の島間のいづれにも参加して、常に先頭を泳いだ。殊に三十九年六月十二日の江の島遠泳は逗子の田越川から流れ込む水の冷たさに震え上がり、小坪沖の逆潮に悩まされ、落伍者が相次いだ。この遠泳は出発から上陸まで七時間四十分を費し、監視船から高橋の姿が見えなくなつて、「高橋君が死んだ」といつて泣いたものもあつたという。遠泳のような技術に加うるに、強靱な精神力を必要とするスポーツに秀でていた高橋は、ひとり水泳の場合ばかりでなく、闘病生活にも、専攻の経済学史の研究にも、根気と勇氣と精神力とが貫らぬいてるように思える。見かけはいかにも瘦身だが、骨太な強さと昔ながらの反骨が、図書館監督時代にもうかがわれる。

大学を卒業して先づ普通部の教員になつた。時の塾長鎌田は憲法の教授に仕立てようと考へたらしいが、高橋は教室で使用した仏蘭西の経済学者シャルル・ジードの「経済原論」に興味をおぼえ、ジードがそれ以前における経済学上の労作の最良果実を、その著の中に保持しようとした努力に共感して、経済学古文献の涉猟に邁進する覚悟をきめた。そこで四十二年大学予科で経済原論を担当し、四十四年欧羅巴留学となつた。経済学の古文献の涉猟といつても日本に在る限りでは思うに任せないものがあつたが、何といつても本場の英国には今迄到底見ることが出来ないと思

めていた十六、七、八世紀の経済古書原版が、図書館や古本屋の店頭で手にすることが出来た。高橋は英国に渡っても学校に入ることをせず、図書館と古本屋で明けくれた。図書館はロンドン大学のヘッドクォーターに附属するゴールドスマス図書館を多く利用し、古本屋は博物館書房やジョージ・ハーディング書店の常顧客となり、その主人とも馴染んで、ほしいと思う本はそれらの人に探して貰うことにしていた。永い療養生活の後、帰国してからも外国の古本屋のカタログには目を皿のようにして注視し、自分の力で買切れないものは図書館に買って貰うことに努めた。高橋は図書館の相談役などにはならなかったが、相談役以上に図書館の図書の収集には努力した。田中監督時代の十七世紀以来の東印度会社関係文献も、小泉監督時代の草双紙・合巻類の収集も高橋の口添えから初まったことは既述のとおりである。



高橋誠一郎（館長室にて）

変となり、満洲国承認、国際聯盟の脱退と抜きさしならぬ方向が打出されつつあったが、それでもまだ大学図書館には政府の干渉がなかった。ところが高橋監督の頃となると戦争ははてしなく拡がり、国策遂行への強化は大学図書館をして大学内の政策遵奉のみにとどまらず、国家の制約を直接うける。人事にも、図書の収集にも、更らに敗戦色が濃厚となると図書館運営自体それにつながる。実に厳しき時代となるのである。

先づこの頃の図書館人事から筆を進めよう。監督の就任と共に相談役の依頼があつて九年三月初顔合せがあつた。文学部から間崎万里、橋本孝、西脇順三郎、経済学部から野村兼太郎、増井幸雄、法学部から峰岸治三、潮田江次であり、図書館側から高橋、安食、橋本が出席した。主な仕事は図書推薦で、初めのうちは熱心であつたようだが、怠り勝ちになり、後には年一回会合して意見を述べ会う程度になつた。

図書館の事務員はこの時代は変動が烈しい。大きくわけて昭和十六年事務主任安食が軽い脳溢血になつた頃が境界になる。前半は大体小泉時代と同様で、監督の信任を得ていた大学出の人達は早め早めに教員に転出して行つた。加藤元彦は昭和十年に、橋本勝彦は昭和十二年に去つた。三辺清一郎を残して後は

下田 博	経済学部卒	昭和九・四	昭和十三・四	予科教員へ
戸鞠 雅彦	法学部卒	昭和十・四	昭和十三・四	予科教員へ
伊東弥之助	経済学部卒	昭和十・八	〃	
小林宗三郎	経済学部卒	昭和十二・四	昭和十四・四	退職
太田咲太郎	文学部卒	昭和十三・五	昭和二十三・六	死亡
石川 博道	文学部卒	昭和十四・五	〃	

三辺、伊東、太田、石川らが永く図書館にとどまつた。前述のようにそれまでは教員への踏み台であつたが、この頃から自然発生的に司書ライブラリアンが出来て来たといえよう。まだ図書館学は発達していなかつたから、図書館技術を図書館協会主催の図書館講習会などで学び、あとは年季奉公的经验が司書たらしめて行つた。この外に「福沢諭吉伝」で石河

幹明の助手をしていた富田正文が昭和七年から九年にかけて、又早逝した伊藤秀一助教授の未亡人肇子が昭和九年から十一年まで短期間勤務した。

当時の職務分担は昭和十年五月三辺が残した表がある。補助的兼務を省いて記すと

庶務 安食 (各種統計作成・往復文書・用度品保管)

受入 安食 (図書・雑誌注文・寄贈依頼)

国分 (購入図書雑誌の受贈・郵便物仕分け・製本事務)

分類目録 三辺 (洋書分類・カード目録作成及検査・洋書調査)

橋本 (洋書分類・カード目録作成・洋書調査)

下田

古川 (洋書カード目録作成補助・タイピスト)

和漢書 井上 (和漢書分類・カード目録作成及検査)

木島 (和漢書カード目録作成補助・邦文タイピスト)

楠山 (和漢書印刷目録編纂)

幡 (和漢書印刷目録編纂補助)

登録配列 佐々木 (原簿の保管・和漢洋カード目録検閲及配列・書庫整理)

伊達 (洋書原簿記入・和漢洋書新着報告作成)

吉岡 (和漢書原簿記入)

三辺 (雑誌整理・貴重書禁閱書整理保管)

貸出 山木 (教職員館外貸出・貸出簿記入保管・欠本に関する事務)

伊藤 (学生・外来者貸出事務・閲覧統計作成)

戸鞠

この他、給仕七人、小使五人である。永年勤続でこの表に見えない高橋(秀)は八年に、岡崎は九年、小池は十年にやめた。井上・幡は臨時雇員で、十四年に事務員に昇格する。

三辺は分担表と同時に事務系統による一覧表も作成した。その意図は図書館の事務機構を改革したい意図を持っていたことによるらしい。この頃は退職者が出ると大学卒業生を新規に採用していたから、そしてその退職者の職務に当たったので、従前のように大学卒は洋書整理というのではなく、例えば戸鞠のように単なる貸出業務だけに終わってしまう。能力あるものを適所に置けない弊害を指摘したものである。そして事務の重要ポストを握っているものは田中監督以来の人々であるといい、俗に庄内閥といわれていた。昭和十年の三辺の意図は学校出の最古参である橋本が中に入って、各人の意見を調整して起りかけた悶着も不発に終わったが、やがては爆発するものであった。

昭和十六年三月十七日安食事務主任は図書館で突然、ペン持つ手が動かなくなった。翌日は休んだが、折から第一回全国図書館総合協議会が開かれていたので、その方に出席したものと思つて皆気付かなかった。ところが十九日、令息に助けられて出勤した主任の姿は半身不随のものであった。学期末の多忙時期なのでせめて判だけでも押そう

と、家族の反対を振り切って出勤したとのことであったが、館員になだめられて三十分程で帰った。果然その日から、庄内閥と三辺との反目が表面になった。庄内閥といっても代表選手は国分剛二である。国分は明治二十五年鶴岡生れ、大正八年雇員として就職、大正十三年事務員に昇格した。学歴は高等小学卒業後、正則英語学校に一年ばかり在学したのみであったが、勉強心に富み、羽柴雄輔に近づき山形県の郷土史を中心に幅広い趣味を持っていた。筆がたつので郷土史ばかりでなく、図書館雑誌などにも投稿し、昭和三年発表されて急速に普及されつつあった森清の「日本十進分類法」に対する批判を執拗に繰返し、図書館界にも名を知られていた。

三辺は明治三十年富山県生れだから、国分より五歳年下、大正九年理財科を卒業して古河商事や米井商店などの貿易商社に勤務し、シベリヤ出兵に駆り出されて退社し、帰国後小泉教授のマルサスの経済学原理翻訳を手伝っているうちに、図書館に就職した。従って大学出の事務員が教員を志望して比較的短期間で図書館から去るのとは違って、永く在職した。国分を中心とした庄内閥が結束していたのに対して、大学出の館員は必ずしも三辺を支持していたわけではなく、学歴からいって安食の後任は三辺だろう位にしか考えていなかったから、二人の抗争があまり露骨になると顔をしかめる向きが多かった。高橋監督はその中間策をとって佐々木良太郎に後任をすすめた。佐々木は明治四十二年就職し、田中監督の知遇をうけてはいたが、庄内出身ではなく、人と争うことを好まず、地味な仕事を誠実に、十年一日の如き態度でいた人である。この人なら三辺も国分も文句のない処であったが、佐々木は固辞し続けた。そこで八月十一日三辺が臨時図書館事務主任心得に就任した。しかし三辺の在任は一年に終わった。十七年九月応召の赤紙が来た。これより先、十二年八月にも召集されたが即日帰京であったので、今度も多分……と本人は思っていたらし

いが、戦局の苛烈は前回の比でなく、その儘軍隊にとどめられた。お鉢は国分には最早行かず、太田が仕事を引継いだ。戦局は逼迫し応召は相次いだ。図書館からの最初の出征は十三年九月、給仕の町田敏治が中国へ出発した。翌十四年十月には元給仕で退職した松島義弘戦死の報が入った。十六年七月には石川が応召、十七年九月三辺応召、それから図書館へ就任するもの、退職するもの複雑となり、落付いて仕事が出来なくなった。

就任 退任

岩崎恒雄	経済学部卒	昭和十七・三	木島久子	昭和十七・八
中尾愛子		昭和十七・九	安食高吉	昭和十七・十
板谷勘兵衛	高等部卒	昭和十八・六	幡利吉	昭和十八・五
保坂三郎	文学部嘱託	昭和十九・一	板谷勘兵衛	昭和十九・三
柄沢日出雄	高等部教授	昭和十九・四	楠山多鶴馬	昭和十九・三
佐々木晄秀	商工部教員	昭和十九・四	山木徳三郎	昭和十九・三
中丸平一郎	商工部教員	昭和十九・四	伊達良春	昭和十九・三

昭和十八年七月には首相東条英機により、補助業務の男子就業禁止の声明が出され、給仕・小使の退職が余儀なくされた。十九年一月二十五日、給仕達が工場へ去るため送別会が催され、図書館は益々無人の図書館となった。

戦争の進展は日本の教育界全般に大いなる変動がおこり、慶應義塾もそれに超然たることは出来なかった。既に十六年に大学・高専の修業年限縮問題が起り、卒業の繰り上げが実施された。十八年には「教育に関する戦時非常措

置方策」が十月十二日の閣議で決定され、学生の兵役徵集猶予の停止、理工系学校の拡充に対して文科系学校の整備統合、学生の徵用強化が打出された。兵役や勤勞動員により学業放棄の学生は増え、他方入学定員の定めによって学生数は減少する一方で、次第に正規の授業が不可能になった。義塾は実に「開塾以来前例なき難局」（小泉報告）に遭遇したというべきで、それに対処して高等部は廃校に、商工・商業両学校の工業学校への転換が企てられ、更らに教職員の人員削減のため六十歳以上の教職員は退職を予儀なくされた。十九年四月一日付で、高橋監督は現役から退いた。館員も山木、楠山、伊達がそれに該当した。ひとり佐々木だけは人手不足の折から生字引視されていた彼を失うのは、後の支障を考えて除外された。それらの後任には廃校になる高等部教授の柄沢日出雄、工業学校に転化される商工学校教諭佐々木暁秀と中丸平一郎が転配された。

## 六 戦時下の図書館運営

高橋監督が経済学古文獻の収集に熱心であり、図書館にもその点で今迄にも貢献してきたから、正式に監督となつて業績をあげるとすれば先づその方面であろうが、それに先立って、小泉時代から引続きである印刷図書目録作成について語って置きたい。

昭和十年の職務分担表に印刷目録の専任には楠山・幡の名があげられているが、和漢図書分類目録の準備に入ったのは、洋書目録の刊行間近しと思われた昭和三年の頃である。図書目録原稿整理員として臨時に井上芳郎が雇われ、和漢書分類系の楠山の配下についた。完成は昭和九年と予定され、先づ最初の年にカード一万五千枚を数人の雇で原

稿に筆写せしめ、次の三年間に一名の専任者と手伝いとでカードの読合せ及び増加分の差加えをなし、後の二年で印刷・校正を完了する内容の計画をたて、五ヶ年継続の予算案を提出した。印刷目録作成の困難は洋書目録の作成で充分図書館内では知られていても、会計の権を握っている学校当局には中々わかって貰えない。五ヶ年計画の当初、原稿整理の筆耕料として七百五十円を計上した。一枚(十六行)五銭として一万五千枚分であったが、五ヶ年計画とあることから割った百五十円分で承認の通知が来た。これでは五分の一しか出来ない。又洋書目録は洋書係を中心として行われたが、和漢書は洋に比して組み易しと考えられたのか、臨時雇で行わせる予定であった。ところがその為に雇われた井上芳郎は採用して見ると適材とはいえない。井上は明治二十一年東京に生れ、早稲田大学政治経済科専門部中退、坪内逍遙主宰文芸協会研究所第二期生として入り、病気で中退、其後は本人談によれば沢正の一座にもいたことがあるという変わった経歴の持主なので、到底綿密さを必要とする目録編纂などにはむかない。とうとう昭和六年楠山専任、幡補助ということで進められた。ところが楠山は明治三年高知の出身、仙台の東北学院本科中退し、時事新報に勤務し博学であった。綿密さには事欠かないが、少し度がすぎる綿密さで、頑固一徹、変り者でもあった。校正を幾度もとって納得のゆくまで続ける。目録は遅れに遅れて、とうとう退職までには出来あがらず、残った原稿(第三巻歴史・地理)は戦災で焼けた。刊行されたものは

慶應義塾図書館和漢図書分類目録

第四巻

政治・外交・経済及社会問題・統計・法律

昭和十一・五刊

同

第一巻

哲学・宗教・教育

昭和十二・七刊

同

第二巻

文学・語学

昭和十四・九刊

同

第五巻

科学・技芸・辞書及類書

昭和十七・八刊

以上のうちの最後の第五巻は目録の完成の遅きにいらだった安食主任が、別働班を作って完成したもので、安食、国分、伊東、古川、木島が昭和十二年二月から、原稿にとりかかり、校正、印刷までを本務の余暇に行ったものである。

さて図書館本来の業務にかえて、高橋監督の収書について語ろう。高橋は留学中からの馴染みの古書肆や、カタログで海外から図書を購入しようとした。英国ではジョージ・ハーディング、ジョン・グラント、ヘンリー・スチブンス、仏国ではマデス、ベルンスタイン、独逸ではフーゴー・シュトライスランドなどで、九年から十二年にかけて注文した。そしてそれを助ける館員には三辺がいた。三辺は洋書係として高橋のチェックするカタログの外国の書店に、大急ぎで電報を打ったり、為替の計算をしたりしていた。三辺は経済学史にも興味を持っていたので、高橋監督の手助けになり、このコンビで平和が永く続けば必ず業績があがったことであつたらうに、不幸にも戦争の進展は欧米からの珍籍は元より、普通の図書も購入することが出来なくなつてしまつた。それは日華事変勃発の昭和十二年頃から怪しくなり、洋書不足のため日独書籍交換の噂が出たのは昭和十四年のことである。この時、欧羅巴では第二次大戦が初まつた。

「昨年（十四年）は西洋の古書市場に珍籍稀書を発見して、大急ぎで注文を出し、本は来たが金を払うことが出来ずに困りぬいたのであるが、本年になつてからは注文は出しても、現品は勿論、有無の返辞さえも来ぬという有様である」心淋しい限りであるが止むを得ない。そこで「前回の歐洲大戦後には生活難に駆られて、泣く泣く其の貴重なる蒐集図書を売り払う学者達が、戦敗国には特に多かつた。斯くて経済学関係だけでも、メンガー文庫、ブレンタノ文庫、

ゾンバルト文庫等が我が国の大学図書館若しくは個人の所有に蔵したのである。此の度の大戦終結後においても、斯うした売立が多く行われることになりはしまいか。若しそうとしたならば、これ等の場合に最高の札を入れて相争う買手は恐らくアメリカと日本であろう」と高橋は思う。洋書不足によって剩し得た金を蓄積して、そうした大物の売立てに備えねばならぬと覚悟するのであったが、それから間もなく日独伊三国同盟が調印され、十六年十二月には米英に対する宣戦布告となり、日本も世界大戦に捲き込まれてしまったのである。

其後の洋書は丸善と三越に依存した。丸善は福沢門下の早矢仕有的の創立で元々慶應とは深い関係にあったが、文具や洋品から洋書に重点が移り、国内需要を殆んど独占する程の実力を持ったのは第一次大戦以後であろう。新刊書のみならず、古版本なども海外に直接注文せずとも一応丸善でこと足りた。大正十二年には三田出張所が正門の脇に出来て、店員が日々出入し、しかも支払は掛けであったから、知らず知らずのうちに借金がかさんだ。昭和十六年四月には丸善からの負債は五万円に達し、稀覯書買入れのために蓄積するどころか、月々丸善に支払って消却に努めた。これは十八年末皆済された。三越洋書部との取引は大戦のための洋書飢饉を補足するため、塾出身者がそこに勤めていたので初まった。また、国際文化振興会の斡旋によっての購入も僅かだがあった。

洋書にくらべて稍入手し易くなったのは中国書である。予科教員であった奥野信太郎は十一年から十三年に、西川寧は十三年から十五年に、杉本忠は十五年から十七年にかけて、外務省在华特別研究員として北京に留学したから、彼等の手を通じて中国書を購入し得た。殊に奥野は琉璃廠リウリヤンや隆福寺街の古書肆を堪能に歩いて文献発掘に努めたので、「円明園雜項則例」のようなものも手に入った。円明園は康熙・乾隆両帝造るところの大築造物であったが、英

仏連合軍に焼払われて今見ることは出来ない。その見積書で、これによって施工及びその費用を知ることが出来る珍しい文献である。その後、北京には北京慶應公館が開設されたので、輸入図書を支払などには便宜があった。

洋書の輸入の困難に加えて、和書の出版も制限されるようになり、昭和十六年六月日本出版配給株式会社が創設されて、自由競争の時代は終わった。配給会社からの割当てのみでは、大衆の需要には応じ切れないので、今迄のように各書店が競って新刊書を持ち込み、図書館がその中から自由に選択するという方法が採られなくなった。図書館から書店に頼み、懇請して、配給図書を確保してもらう時代になって来たのである。そうなる現実のある大きい店に配給量が多くなる。三田通りの本屋である岸田書店、福島屋、慶應書房との取引は無くなり、和書も丸善や三越、それに塾出身の主人を持つ銀座の三昧堂などに限られてしまう。

こうした時期には図書の纏った寄贈や一括購入が一層重みを加える。年代順に主なものをあげよう。昭和九年故滝本誠一博士の蔵書が購入された。滝本博士の古書収集は知られており、大正年間には「日本経済叢書」が、昭和になつてから「日本経済大典」「日本産業史資料」が博士の手で編纂発行された。これらは其後の日本経済史・思想史に欠かせない基本資料となつたことは明瞭である。これらの原本の一部は生前京都帝国大学に譲られたが、其後入手のものや未収文献の多数をまだ所蔵していた。「滝本文庫」と名を付せられたこれら図書が図書館の異彩を添えたことはいうまでもない。また同文庫には英独仏に渉る洋書、それも稀覯書に価するような図書も見出されるのは、専攻を日本経済史とした学者として不思議と思えようが、博士が明治三十年代に貿易論で田口卯吉と争つたことなどから思ふと、その所蔵は当然のように考えられる。

昭和十年門野重九郎が蟹迺舎左文の蔵書七百二十三冊を寄贈し、更らに十六年秋農屋望成の蔵書百余冊も追加寄贈された。合せて狂歌ものの集大成が出来た。前者は写本が多く、後者は刊本が多い。これらは既収狂歌の蔵書を加えて、十六年の秋「慶應義塾図書館狂歌書目録」が出版された。同年ミュンヘン大学の刑法学者ラインハルト・フランクの蔵書が嚴重な木箱で送られて来た。フランク文庫と名付けて直ちに整理にかかったが、専門的な難解なものが多く、ために法学部の教授が手伝うからという口約束が初めからあったようである。その教授は恐らく永沢邦男であり、その入手の斡旋も同人の尽力があったらう。量は多かつたが、学問の範囲が狭かつたためか、専攻の人以外あまり知られず、整理も遅れた。十一年には尾崎行雄の第六回以降の衆議院議案書類約五百冊の寄贈があり、同年松永安左衛門還暦記念として図書及び図書購入費の寄附があった。図書は和千九百八十四冊、洋は五百九十三冊に上る。又、花房孝太郎子爵から千九十一冊の寄贈があった。この頃は二・二六事件の後であり、戦火拡大の徴候も著しく、多分に蔵書整理の傾向が出て来たように思われる。十三年には茂木惣兵衛の蔵書を購入することが出来た。茂木は実業家から学界に移り、英国へ留学して若く死んだ人で、フェデラリズムの歴史を書くために収集した洋書六千冊である。中には十八世紀の哲学者ピエール・ペールが和蘭で発行した新聞「雑纂」、フーゴー・クロチウスの「戦争と平和」など珍らしいものも少くない。同年には古い塾出身の高橋義雄が水戸学及び茶道に関する写本千八百冊の寄贈があった。高橋は箒庵と号し晩年は茶道に凝った。朝吹英二の寄贈本と共に、茶道に関する特殊な収書をなした。慶應茶道会編「慶應義塾大学図書館高橋箒庵文庫目録」は二十八年三月騰写版で刊行されている。

昭和十四年以降、戸川秋骨、水上瀧太郎、馬場孤蝶歿して、その遺蔵書が寄贈された。三者とも批評家乃至作家で

あって、純然たる蔵書家ではなかったから、稀覯書と称するものは殆んど見られないが、「秋骨遺蔵」の蔵書票ある図書はトマス・モア、アイザーク・ウォールトン、サミュエル・バトラ、ラムなどは原典からその研究書の主なるものが収められており、一九二〇年代から三〇年代の英文学、伝記文学の作品評論が網羅されているのは流石である。水上瀧太郎は久しく三田文学の実質上での主宰者であったので、水上への献呈本は三田派作家の作品全部を集めていたといつて過言でない。殊に久保田万太郎が贈った著書のすべてには、それぞれ異なる献辞と署名があつて今となつては貴重であつた。馬場孤蝶所蔵本は小寺謙吉を介して申出があり、鈴木信太郎画く蔵書票が付けられていた。秋骨と違つて南欧・北欧の小説家、劇作家の作品が多く、しかしその大半は英訳書で原語本ではない。明治から大正へかけての外国文学咀嚼の研究上の好資料といえた。しかし残念なことに水上、馬場の二蔵書は終戦末期の寄贈で、図書館は人手不足に苦んでいた頃であるから、積重ねられて平和回復を待つうち、戦災で失われてしまった。三田文学の作家ではないが三田派に愛好者が多く、本人も三田に好意を持っていた泉鏡花も歿後、未亡人の手から原稿及び遺品一切が寄附された。それは慶應大学の一隅に鏡花を記念する部屋を建てて、生前の俤を残そうということであつた。予定は図書館の八角塔の最上層を改装してあてる筈であつたが、戦災はそれを空しくしてしまつた。しかし鏡花の原稿は鍋木清方画伯の染筆になる題簽をつけて、戦災のときは綱町にあつた倉庫に隔離されて無事であつた。

幕末より明治にかけての啓蒙書を主としたものに十五年寄贈の早矢仕四郎旧蔵と、十六年寄贈の内藤政道旧蔵書がある。早矢仕は丸善創始者早矢仕有的の長男で、幼稚舎からの生えぬきの塾育ちであるので、塾関係の資料・教科書に恵まれ、内藤は九州延岡藩主の子孫で、同藩は福沢諭吉と関係が深かつたので明治初期の啓蒙書が豊富であつた。

この二蔵書も半ば未整理で、その一部分は焼けた。

十八年五月フランク・ホーレイ文庫が購入された。ホーレイはロンドン・タイムスの記者であったが、永く日本に住み、日本の婦人を妻とし、蔵書家として知られていた。ところが戦争で彼は帰国し、蔵書は敵産として政府が没収し、その売却を三井信託に依託した。三井信託ではその価値の大きさを認めて、散佚を避け、一括購入者を探していた。偶々当該担当社員が塾出身であったので、慶應に話を持ち込み、図書館が六万円で購入し、その整理のため文学部嘱託保坂三郎を招いた。これが戦後問題になったホーレイ文庫の発端である。

高橋監督になって最初の展示会は、昭和九年六月に催された「ナチス文献展」であった。ナチスの正式名称は国粋社会主義独逸労働党といい、一九二〇年（大正九）成立し、永い雌伏時代があった。ナチスとは同党を侮蔑した呼名であったが、広く通用された。昭和八年ナチス党首ヒトラーは正式の手順によって独逸国総理の位置にのし上った。

まだヒンデンブルグ総統のいる頃であったが、新興独逸のホープとして名声噴々たるものがあった。この展示会は時局紹介という意味のものであったが、独逸大使デイレクセン初め参観者がきわめて多かった。十一月には福沢生誕百年並に日吉開校記念祝賀会と合せて「福沢および物故先輩に関する展覧会」、慶應独逸文学会主催の「シルレル誕生百七十五年記念展」、理財学会主催「マルサス歿後百年記念展」が相次いで開かれた。そして戦争の激化を気にすることなく、それから以後も展示会は次々と開かれたのである。但し主催は塾内の学会が受持ち、図書館は場所を提供するか、後援となるが多かった。

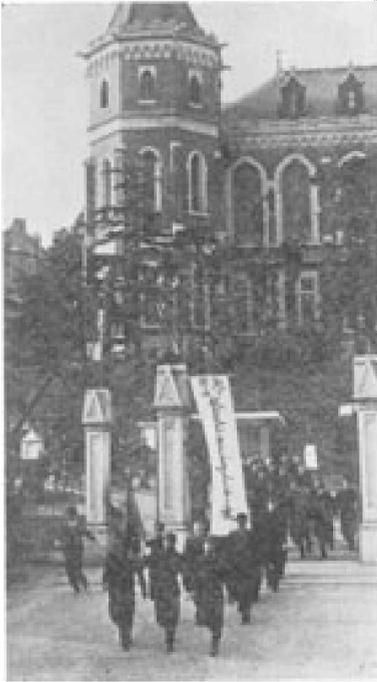
昭和十年以降の展覧会の名だけをあげて置こう。「徳川時代経済資料展」「欧州交通史料展」「明治社会経済思想

文献展」「慶應義塾学生調査及三田街社会調査展」「原始及古代文化資料展」「第十七世紀刊行経済文献展」「支那考古学展」「浮世絵西籍展」「アダムスミス歿後百五十年記念展」「水上滝太郎展」「月岡芳年五十年忌展覧会」「東亜文化資料展」「福沢先生資料展」などで、年一回乃至二回であったが、内容は充実し、規模は大きかった。十七世紀刊行経済文献及びアダムスミス記念展は高橋監督の得意とする分野で、三辺が懸命に作った目録があり、学界でも好評であった。月岡芳年記念展は高橋所蔵の芳年作品六十三点初め、小林きん子、鍋木清方など由縁の人々の出品などもある。暗黙たる時局を忘れしむる好展覧会であった。時局の進展はこうした会をも妨げがちとなる。第二回日本教育学会に併せて開かれた福沢先生資料展は十八年の四月に行われたが、開期五日の予定が警戒警報発令のため三日にして中止となった。

十八年には欧羅巴戦線が愈々急迫して、その九月にはイタリヤの降伏が発表された。日本への攻撃激化が必至であるとき図書防衛はどうあるべきか。高橋監督は稀覯書の疎開を一応考えた。慶應の医学部は伊豆月ヶ瀬村に温泉泉究所を持っていた。其処へ疎開しようかということであったが、温泉の湿気が皮製の図書の保存に却って悪いかも知れないという説もあって打消えた。この頃の考え方は図書館の書庫は他のいづれの民家よりも安全と思えるから、極力館外貸出書は回収しよう。勿論、百挺級の命中弾であれば不運とあきらめる外はないが、焼夷弾位であれば書庫内に設備されたる金庫、それに次いで書庫最下層に稀覯書を集める。もっと切迫すれば土嚢でその半地階を囲えば安全を期待出来よう。図書館を枕に防戦おさおさ劣らないといったことであった。

## 七 拘束された時代

高橋監督の在任時期は昭和八年十二月から十九年三月までであった。国際聯盟も脱退し、全く世界から孤立しても戦争を続けようとしていた。九年に文部省思想局が出来、日華事変も拡大し、十三年には国家総動員法が公布され、十五年日独伊三国同盟が結ばれ、翌十六年十二月には大東亜戦争にまで捲き込まれて行った。食糧管理が行われ、米機空襲への備え、学生の徴兵猶予撤廃へと追いつめられて行った。こうした時期であるから、高橋監督は図書館で自由に腕を振えるわけはなかった。館員にしてからが既述のように出入が繁しくなって落著かない。その上に日常業務



学 徒 動 員

の中に戦時体制が組み込まれる。昭和十二年日華事変の勃発と共に、九月には慶應義塾にも特設防護団が出来た。「塾内の諸施設生命財産を非常の危害より防護せん」とするため、団長には小泉塾長がなり、防護地区は三田、四谷、日吉、天現寺及び特別地区の五つに分けた。図書館は当然、三田地区の中にあつてそのみで一組織を作った。分団長に高橋、副分団長に安食、監督として佐々木、伊達、楠山、整理に山

木、国分、戸鞠、防火に吉岡、井上、幡、三辺、下田、伊東、小林、古川、木島が割当てられた。十日に結成式があり、十五日から十九日にかけて第一回の防空訓練があった。そして毎年一回位宛、演習が行われたが、何んといつても日華事変のうちは航空機の来襲などは考えられなく、いわば暢気であった。ところが十五年三月「学校特設防護團要綱」に基き改組されると、団長小泉、分団長高橋の外に警察署長、消防署長、区長の指令の下に動かなければならなくなった。その上十六年八月頃から、所謂日本を包囲するA B C Dラインの完成が人々の心に脅威をあたえ、時あたかも年老いた安食事務主任から、壮年の三辺主任代理への交代があったので、図書館防衛強化が採用された。「慶應義塾図書館非常時防護要領」というものしいものであるが、要するに空襲警報が鳴ると、分担当が定められた館員が、重要書類を安全な場所へ移し、閲覧者を安全地帯に誘導し、書庫の窓の鉄扉を完全に閉鎖し、電源を切って退去し、慶應義塾防護団に合流して活動するというのである。それらの練習は屢々行われ、書庫の閉鎖が前より一分早かったとか、二分遅くなったとか三辺主任代理が時計を見ながら叱責した。斯様な有様であったから高橋監督は図書館に新規の事業を行うことも出来ず、極端な言葉を使えば、図書館自体の仕事からいうと、在来の継統より一步も出なかつたといえるかと思うが、高橋時代の特徴はそんな処にはなくて、戦時下文教政策の反動化に抵抗する高橋の姿勢にあったように思える。

昭和七年五月創立七十五年記念式典に参列した秩父宮が、同時に行われた西洋経済思想史展で案内役の高橋に英書が多いといつて不興であった話は既述した。秩父宮は陸軍の急進派の若手将校と密接であった。彼ら若手将校の一端には福沢諭吉は嫌われている。自由主義の慶應義塾の存立は危いとささやかれた。殊に図書館のステインドグラスは

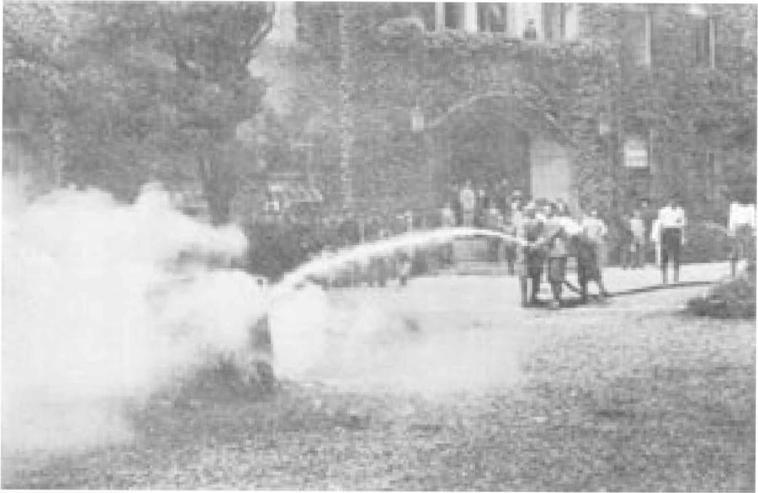
女神の前に、老髯の武士が忙然と立っているのが気に喰わない。「ペンは劔よりも強し」の文句は言語同断であると噂された。高橋監督はそれを聞いて「では、ペンを筆にかえましよう」と真面目な顔して語ったという。

余談であるが、この若手将校が引起した二・二六事件には図書館がかかわりがある。二・二六というのは昭和十一年二月二十六日、麻布三連隊の将兵が蹶起して、斎藤実、高橋是清らの重臣を殺し、議事堂を中心とする霞ヶ関から赤坂に連らなる丘陵地帯を占拠した事件である。交通は一部が遮断されただけなので、教職員・学生の通学には不便はなかったが、新聞は休刊となり、風説紛々として人心が落ち着かなかった。そして二十九日は愈々反乱軍を掃討する日と定められたので、学校も図書館も休みとなった。教職員は待機して議事堂方面に砲火の挙るのを見つめていた。慶應四年福沢が上野の戦争中に講義をやめなかった話は有名であるが、上野と新銭座塾の距離より、霞ヶ関・三田間の方が遙かに近い。金杉方面にあがる汽車の煙にも恟々とした。しかし掃討は降伏の勧告によって銃声を聞かずにやんだが、図書館との関係はこれからである。事変から暫く日を経た一日、憲兵が数人ドヤドヤと事務室に入ってきて、安食主任と応酬を繰返して引きあげた。反乱軍の青年将校の中に、普通部の英語教員安藤栄次郎の息子輝三大尉がいて、彼の部屋から慶應義塾図書館の蔵印ある北一輝著「日本改造法案大綱」が発見されしによる。この書は「その思想の根柢において絶体に我が国体と相容れざるもの」(判決原本)であり、図書館では第二特別書として一般には禁閲の扱いをしていたが、教員は許可を得れば見ることが出来た。息子の頼みで父親の教員が借り出してあたえたものらしい。憲兵隊に没収された本は図書館には戻ってこなかった。剽軽なところがあって「アンちゃん」と仇名されて学生に親しまれていた父親の安藤も図書館へ詫びに来たが、息子の行動には弁護するところがあって、その硬

骨さには意外の感を入々にあたえた。事件は北一輝ら国家社会主義一派の処罰が行われたが、青年将校には及ばなかった。安藤大尉は秩父宮と最も近いと噂された人物である。

第二特別書という言葉が出て来た。これは国体に添わないもの、国策遂行上害のあるものと見做され、一般の閲覧は禁止される本のことである。当時図書館には特別書が二種類あった。一は稀覯書に属するもので第一特別書といわれ、その基準は社会思想史の上で、ある役割を果した著者の作品、そして大体一八四八年——ジョン・スチュアート・ミルの原論公刊の年——以前のものとされ、この項は経済部門で五百七十余冊、社会問題部門に百余冊がそれに数えられていた。これは閲覧者が監督の許可を得て、閲覧台のそばで見ることが出来た。第二特別書という閲覧者に公開されないものは初めは風俗関係の猥褻本か、限られた思想——共產主義・無政府主義のもののみであったが、高橋監督時代には国策遂行に害あるものと認定されたものが加わり、文部省や警察署から月々騰写版に刷られて、そうした禁閱本ははてしなく拡がって行った。

昭和十年には美濃部達吉事件が起きて、これまで権威ある必読書とされていた美濃部の憲法に関する書物一切が第二特別書に組み込まれ、十三年には大学教授グループ事件、十四年には自由主義者河合栄治郎まで鎗玉にあがって、それらに関する図書が禁閲となった。他方、文部省に教育振興協議会が出来、大政翼賛会が成立し、日本出版文化協会が創立された。その頃——十五年——が最も厳しい図書行政の年となった。七月十二日マルクス・エンゲルス関係図書二百冊（和訳書のみ）の閲覧禁止命令が出た。高橋監督は後年回想して「三田の警察署員がやって来て、部厚な禁制書目を館員につきつけ、これに登載されているような書籍が一部でも図書館に所蔵されているならば、至急、警察署に



防空演習（図書館前広場で）

供出するようにと命じた。まさに、始皇の焚書が行われようとしているのであった。慶應義塾図書館は不幸にして、これ等の書籍の殆んど全部を所蔵して居った。」出張して来た私服の署員は図書館の書庫を一巡して驚いたようであった。多分、これまでは区内の公共図書館を巡察していたものらしく、数冊を抜き出せば役目を終えたのであろう。ところが慶應図書館の書庫では「どれもこれも駄目だ。皆んな駄目だ」といいながら、本を手にかざすことなく早々に去って行った。其後、交渉が幾度か重ねられ、高橋監督の頑張りや抵抗とが功を奏して、辛くも供出を免れることが出来た。そこでその年の十月一日から五日にわたる防空演習の真只中、館員は演習の合間に全員が、これら「危険図書」の目録カードを撤去する仕事に精をだした。夜は交替で宿泊し、模擬爆弾の始末をし、昼はカード作業の連続で疲労はしたが、大量の図書の供出を免れたことは有難い限りであった。これらの図書はカードの撤去によって学生及び一般閲覧者の利用は出来なくなったが、隔離されなかったので教職員は書庫内で見ることが出来た。

終戦後、大学の独立が高らかに叫ばれるに先立って、これらの書籍はいち早く日の光に浴し、広き読書子の前に姿を現わし得たのも、硬骨監督のいたお蔭であるといわねばならない。

戦争の激化は禁閲本の範囲を益々ひろくした。今日では考えられないような普通の本が、敵に機密を知らせるといふことで、閲覧カードが取り除かれた。十七年七月防牒週間の指令で統計書、官庁の報告書が見られなくなった。更らに航空機から写した都市の俯瞰図のある普通の地理書もその中に加えられた。反対に教学局より推薦図書が選定され、その利用を充分ならしめるため、図書の出版飢饉のさ中にあっても、余分の冊数が配給された。国策に便乗したそれらの図書の利用状況を知るために、私大図書館協議会では調査表を作ったりした。

思想問題が厳しくなると、各大学の教授が職を奪われる。そしてそれらの教授が元の学校の図書館を利用することさえ、はばかられ、迷惑がられる風潮になって来たとき、慶應の図書館が一般公開を続けるということも、勇気のあることであった。高橋監督はこうしたとき「大学図書館の社会奉仕」が必要であり、一般読書人への便宜を図り続けようと決意する。「学校をはなれたまじしい一読書生にとっては、図書館こそが命の綱である。しかし私の勉強目標のためには、日本の首府東京の図書館の状況は、先進文明諸国のそれにくらべて、問題にならないほど、不備、偏狭、不親切、非人間的、かつ役人的であった：三田の慶應大学の図書館は当時、日本におけるたった一つの公開大学図書館であって役所風のくさみがなく、気もちがよかった。」（大塚金之助著「解放思想史の人々」）図書館では試験期になると学生の入館が多くなって、外来閲覧者の入場を一時停止するのが永年の慣例である。その時に偶々来たある外来者は、その張り紙を見て、慶應図書館もとうとう公開をやめたのかと落胆したという話も残っている。外来者

は戦前戦後を通じて、大部分が他校の学生であるのが常であるが、この時期は他校の元教授達が多く姿を見せた。そのことが十七年頃には警察の知るところとなり、私服の刑事が図書館支那脇の神代杉の蔭にたたずむ風景も見られた。

閲覧学生は相対的にいつて相変わらず少なかった。大学の講義は大部分ノートであった。その頃学生であった池田弥三郎教授は回想する「大学の講義というと、筆記する学生の側からいうと、はなはだしく「らく」な講義が多かった。：一番らくだったのは先生が、先生自身の著書を学生に買わせて、御自身もその本をひらいて読んでいく、文字通りただ読んでいくという講義であった。：次に「らく」だったのは先生がノートを作ってきて、それをゆっくり読んで筆記させるといふ講義であった」そして「ノートのとりにくい先生の講義はフリー・トーキングの先生の場合であつて」そうした教授は寥々たるものであつた。池田教授は文学部であるからその寥々たる教授には西脇順三郎と折口信夫両教授の名をあげている。他の学部も殆んど同様であつたろう。どうしてこうした講義が普通になつたのだらう。教授の多くは当時欧羅巴留学の経験を持っていたのに。野村兼太郎は大正年間英国のケンブリッジ大学のキングスコレッジに学んで「日本の学校制度と違って、講義と試験とはまるで別のものだから、講義を聴く者は数においても少なく、日本の学生のように教師のことを一から十まで筆記しようとする熱心さはない。然し皆、ゆっくりと謹聴しているから気持はよい。この方が本當の学問の致方のように思われる。」そして「図書館を主として、たまに講義をききにゆく」（欧州印象記）生活が繰返された。それなのに日本に帰つた野村は日本の習慣に従つた。しかも初めの数年間は英語で話してノートにとらせたという。ノートが採れないのではない、発音が悪いからだなどと学生に

ささやかれた。ノート講義の發生考証はここでは省く。ノートさえ出来ていれば図書館はいらぬ。試験期に満員となって外来者を拒めるのは、参考書を読むためではない、友達から借りたノートの引写しの忙殺と、図書館内がスチームで暖いからであった。

他方、図書館側の学生に対するサービスが十年一日であったことも、閲覧不振の一因に数えられよう。明治末期の大学部図書室係のように、学生の要求する本をとり出した後は、なたまため煙管でスパスパやっていた閲覧係と全く同様な人達がこの事務を継承していた。閲覧室は禁煙なので煙草こそ慎んでいたが、高い閲覧台の上に出て出納する給仕を監督するのが関の山で、学生に本の質問をされても答えられなく、漢書など面倒なものになると、自分で行って持って来てよろしいという位で、そうした人が却って話がわかるとされていた。永く閲覧係を勤めた人には変り者が多い。山木徳三郎は明治四十五年から昭和十九年退職まで、三十一年間をこの係で殆んど過した。明治十六年生れで慶應の商業学校を卒業し、東洋汽船や尾城汽船の乗務員を七年程経験した。後、余戯として細字を書くのに巧みであったことから、筆写生として図書館勤務を思い立ち、戸川明三教授の末弟であったことから、その紹介で図書館員になった。船に乗って日本の各地を知っているので話題は豊富で、世故にはたけていた。給仕のあつかいも、学生との接衝も円滑であった。統いて永くこの係を勤めてた人に小池益郎がいた。明治三年生れ、日清戦争に従軍して勲八等であった。明治画壇の雄、橋本雅邦門下で、師の歿後、影写が巧みということで謄写の仕事求めて図書館に就職した。後、閲覧係の欠員からその係になったが、結局、頭の中は良い絵を描きたいということで一杯であった。従って閲覧台についても本の配架すら知らない。分類も知らない。それでも十三年七ヶ月退職までじっと辛棒した。雅邦門

下といえは横山大観・下村観山ら日本美術院の綜々たる大家と同門である。彼の語る閱歴話は面白い。雅邦は池の端の先生といわれて、酒宴が華美であった。小池は常にその酒宴に侍って重宝がられていたらしい。学びとったものは遊びであつて、絵筆からではなかつた。大観らが旭日昇天のように名声が高まるのを横目に見て、今に見ろ、今に見ろと閱覧台の上で構想を練っていたのである。彼が高橋監督や妻子の留めるのを振り切つて図書館を退職したのも、なまじ収入があつては後世に残るような絵が描けないと背水の陣をしいたつもりであつた。それでもどうとう絵は出来なかつた。

昭和年代に入つて世は不景気で、就職難から大学出も図書館に職を求めた。そして閱覧係にもなつた。山木・小池などという人達と違つて、学生の相談にも或る程度乗れる。館員と学生との断層がなくなつたことは偶然ながら好結果を生んだ。思想問題で追放された知識人に慶應図書館が評判が良かったのも、こうした新人が最前線にいたからであつた。大学出の中には永く図書館に勤務する者も出て来た。司書ライブラリアンらしい者もこの中から出て来るのであつた。高橋監督の時代は戦争末期のてんやわんやの時であつたが、古いものから新しいものへの芽ばえが見出される時期であつた。

